翻　訳

ジャック・ロンドン作品の翻訳３編―手紙と２短編

森　孝晴，平田ひかる，戸川聖也

朝鮮からチャーミアンへの手紙（1）

1903年までにジャック・ロンドンの作家としての名声は明らかに確立されていた。この年に彼は雑誌や新聞に18本の物語やエッセイと３冊の本を発行・出版していた。３冊の本とは，『野性の呼び声』『ケンプトン―ウェイス書簡集』『奈落の人々』である。この年の終わりにはロンドンは『海の狼』を脱稿していた。またこの年には彼と妻のベシーが別れた。

ロシアと日本の間でトラブルが持ち上がった時，『サンフランシスコ・イグザミナー』がロンドンに従軍記者として日本と朝鮮に行ってくれないかと持ち掛けた。1904年１月７日付のクラウデスリー・ジョーンズへの手紙の中で，ロンドンは次のように述べている。

> 今日船で横浜に発つ。『ハースト』のために行くんだ。『ハーパーズ』や『コリアーズ』や『ニューヨーク・ヘラルド』のために行くこともできたが，『ハースト』の提示額が一番よかったんだ。

彼は「S.S. シベリア号」でほかの多くの従軍記者とともに航海した。その記者たちの中には，『ロンドンタイムズ』のライオネル・ジェイムズ大佐，『ロンドン・デイリー・エクスプレス』のパーシバル・フィリップス，『ロンドン・スフィアー』のアーティストであるシェルダン・イングリス・ウイリアムズ，『ニューヨーク・ヘラルド』の O.K. デイビス，『コリアーズ』のフェデリック・パーマーと R.L. ダン，そして『コリアーズ』の老練な従軍カメラマンのジェイムズ・H. ヘアーがいた。ヘアーは，５日後の１月12日に28歳になった。

出航する前日にロンドンは『海の狼』の原稿を脱稿したが，この作品は『センチュリー・マガジン』に連載されて，マクミラン社から書籍として出版されることになっていた。ベシーとの離婚協議が進むなか，彼はチャーミアン・キトリジと親密な仲になっていたが，『センチュリー・マガジン』とマクミラン社から送られてくる原稿の校正をチャーミアンとジョージ・スターリングに任せた。また，ロンドンはチャーミアン・キトリジとの間で，『イグザミナー』の記事にはあまり書かなかった日々の出来事や経験について私信のやり取りをした。ここには，その手紙の中で従軍記者としての彼の活動にかかわる部分のみを掲載する。

1904年１月13日，「S.S. シベリア号」上にて

体がややだるく，ふらっとするが，まだリングに残っているよ。インフルエンザに見事にやられてしまった。もちろんこんな状態じゃ眠れないので，頭がぼーっとなったままデッキチェアーで１

キーワード：ジャック・ロンドン，翻訳，手紙，短編小説

日半過ごしたよ。どんなに節々が痛んだか。どんなひどい夢を見たことか。

ホノルルが見えてきたので，あと１時間くらいで接岸してこの手紙を出せるだろうし，戦争が起こったかどうかもわかるだろう。

インフルエンザを除けば，いい旅さ。天気は文句なし。船もそうだ。船長室のテーブルについたり，あともすべてすばらしい。

1904年１月15日，「S.S. シベリア号」上にて

きのうホノルルを出航したよ。相変わらずインフルエンザはつらいが，快方に向かっている。ワイキキの寄せ波のところで泳いだ。ハワイアン・ホテルでコンサートを聴き，ほぼ充実した時間を過ごしたよ。

面白いことがあった。シベリア号の中国人消防士の開いた賭博に参加して，25分で３人の胴元を破産させ，14ドル85セントをせしめたよ。僕は，自分の新しい生き方を見つけたね。

従軍記者たち，「ハゲワシ連中」，つまり愉快な仲間。乗客名簿はホノルルに残った連中のおかげで人数が減らされていたので，我々は船長室のテーブルの周りに固まった。実はホノルルまでの旅には，３組の新婚夫婦が一緒だったが，彼らは船長室の上席に座っていたよ。妙な手紙になったけど―従軍記者たちは僕の周りでふざけていて，ちょうど今も僕は盛んにからかわれているところなんだ。

1904年１月20日，「S.S. シベリア号」上にて

前回書いてから時間がたったね。なぜかって君は思うだろう。あのね，僕は最も不幸な人間の中で最も運のいい人間だって知ってほしいな。ホノルルを発った日に，僕は足首を強打して，汗だくになりながら65時間も仰向けに寝ていたよ。昨日はイギリス人の従軍記者たちに背負われて甲板に出してもらい，今日もまたそうしてもらったよ。

足首を強打するなんて不運だったが，（僕に君への手紙を書けないようにさせた）不運は，むしろ僕が集めてしまったように見える友達連中のほうだ。というのは，朝の６時から夜の11時まで，僕の部屋に少なくとも一人以上の訪問者がいない瞬間がなかっただからだ。だいたい３，４人はいたけど，その２倍くらいいたことも多かったね。そこで僕は思ったよ，何か事件が起これば読書の時間がたっぷりできるけどその実一行たりともゆっくり読む時間は残りやしないってことをね。

僕は興味津々で六日目を楽しみにしてるんだ。もし外科医の気持ちが変わらなければ，僕は甲板に足を踏み入れて松葉づえをついて歩くのを試せるからだ。

もちろん君が知りたいのは強打した次第のほうだ。僕はジャンプして１メートルほどの高さから落ちたんだ。右足で飛び上がって―左足で着地したのさ。でも，左足は甲板には着地しなかった。丸い棒の上に，長々と寝そべるように着地したのさ。ほうきの柄の差し渡しのところにね。もちろん僕の足先は脚と一緒に跳ね上がった。足首は一方に引っ張られ，他方に向けてねん挫した。すなわち，内側の腱は伸びて断裂し，外側の骨は互いにこすり合わされ，傷つき，そして神経を痛めた―その結果は抵抗し難い連携ともいうべきものだ。

今や僕の両足首は弱くなってしまった。年は取りたくないものだ。両ひざもすでに痛めてしまっているし，さらに今両足首だ。悪いほうに進むことばかりだよ。今一番困惑していることは，この

痛めたばかりの足首がどの程度悪いのかということだ。包帯をぐるぐる巻きにした状態での絶対安静，それが目下の治療法で，外科医ですら，僕がこの足で歩いてみて初めて分かるそうだ。

この手紙を書いて自分の不安な気持ちを吹き飛ばしたので，心配しないでくれ。いずれまた君に手紙を書けるだろうし，横浜に着いたらもっと詳しく知らせるよ。取材がうまく行くといいのだけれど。

1904年１月21日，「S.S. シベリア号」上にて

今日の僕は一見の価値があるね。とても不自由な体で，松葉杖を使ってよたよた歩きまわっているよ。まだ足の関節を使って立っていることはできないけど，横浜につく頃までには歩けるようになっているんじゃないかな。今日は木曜日で，来週の月曜の朝には到着できるんじゃないかと思っている。僕が日本についてから少なくとも１か月くらいは宣戦布告がされないことを祈るし，足首がずっと良くなる暇を与えてほしいものだね。

非常に手厚くしてもらっているよ。とても快適に過ごさせてもらって，だらだらしていると言ってもいい。今はカードゲームをしているところだよ。じゃあまたね。

1904年１月23日，「S.S. シベリア号」上にて

昨日は松葉杖を使ってのそのそ歩いてボートデッキに行って昼食をとって寝たよ。でも今日は松葉杖なしで思い切って歩いてみた。でもほんの少ししか一個室からボートデッキまでしか歩けなかった。

強風が吹いているけど，シベリア号はうまくしのいでいるよ。

追伸：強風は今も強まりつつある。

1904年１月24日，「S.S. シベリア号」上にて

荷造りをしたところだ。明日の朝６時には横浜につくだろう。足首はだいぶ良くなってきたよ。松葉杖をなしで（とてもゆっくり，足を引きずりながら，よく気を付けながら，だけどね）歩いてるんだ。足を骨折することはどうやら免れたから―そのお陰で捻挫っていうのはどういうものか分かっただろ。戦争がまだ１か月ほど勃発しないでいてくれたらいいけど。

1904年１月28日，木曜日

この手紙が読めたらいいのだけれど。列車はガタガタ言いながら進んでいて，車内温度は４度だ。神戸行きの急行に乗っているんだけど，神戸で，出発時間が早まらない限り１月31日に朝鮮行きの汽船に乗れたらと思っている。僕は首都のソウルを目指してるんだ。横浜と東京では実に忙しかったよ。月曜に着いてから今までバタバタと動き回ったけど，これを書いている今もまだバタバタしているような感じだよ。

足首のほうは少しづつだけど良くなっているよ。

僕は何度も何度も電話したんだ。というのも，君の手紙が，僕が乗ることになっている汽船で届くはずだったのでね。でも届いてないんだ。なくなったのか，汽船に間に合わなかったかだね。

1904年１月29日，

今朝，何とか長崎行きの急行に乗り継ごうと思って，押し合いへし合いしている連中とともに，僕自身と人力車３台分の荷物が神戸を勢いよく出発したよ。神戸から出る汽船は２月３日までないので，22時間も汽車に乗らなきゃならないうえにしかも寝台車もないのだけれど，長崎で運よく汽船を捕まえられないかと思ってのことだ。

天候は比較的暖かだよ。横浜線はひどく寒かったね。

今日美しい瀬戸内海を見たんだけど，この海だったら君と僕で今すぐにでも帆走できそうだったよ。でも，思うに，早くても５月―夏を過ごすなら日本で，冬を過ごすにはインドで，って言うからね。

もし僕が戦争関連のことに言及しないときは，検閲か特電かそういったものがあったと思ってくれ。

1904年２月３日，下関にて

仁川に渡航できないかと引き続き努力して，一日かけて長崎と門司を往復しながら汽船を見つけようとした結果，２月１日月曜日にチケットを買って外に出かけて通りのスナップショットを３枚撮ったよ。門司は今や要塞都市だ。日本の警察官は「大変申し訳ない」とは言いつつ，僕を逮捕して，一日費やして取り調べたね。もちろん汽船には乗れなかったよ。奴らは「大変申し訳ない」を繰り返して，僕を月曜の朝に小倉に護送して，また取り調べた。そして裁判にかけられ，火曜日に審理され，有罪になった。罰金５円とカメラ没収さ。東京にいるアメリカ公使に電報を打ってあるのだけど，だれかカメラを取り戻すのに動いてくれてるかなあ。

昨晩，この近在の日本人従軍記者の代表が訪ねてきたよ。とても親切にしてくれたし，「大変申し訳ない」と言ってたよ。彼らは同業の兄弟だね。（黒い帽子をかぶった３人の判事が僕の前に座ってたんだけど）判事たちにカメラの形ばかりの競売を開いてくれるように要請してくれるそうだ。そして，彼らがそれを競り落として僕に挨拶を添えて返してくれるそうだ。「大変遺憾なことです」って言ってたけどね。

２月６日か７日に仁川に向けて発てることを期待している。

1904年２月９日火曜日，韓国沿岸の平底帆船上にて

かつてなく野性的で見事なもんだよ。君が平底船の船長たる今の僕を見られたらいいのに。英語も日本語も話せない３人の韓国人船員と英語も韓国語もしゃべれない５人の日本人船客（迷い込んだ旅人だ），つまり２，３の英単語を知っている一人以外はみんなそんなやつばかりの船の船長だけどね。こんないくつもの言葉をしゃべる連中と一緒に，僕は仁川に向けて韓国の沿岸を何百マイルも航海する旅に縛り付けられているんだ。

どうしてこんなことになったかって？ 僕は２月８日の月曜日に桂吾丸で仁川に向けて出港する予定だったんだ。この日の午後に小倉から下関に戻ってね（カメラは戻って来ていた）。そこで，桂吾丸の運航が日本政府によって中止になったことを知った。日本の戦艦がすでに海峡を通過しつつあるということ，夜中に兵士たちが連隊に加わるようにと招集されたことを知ったんだ。

僕は間髪を入れず急いで行動した。それは出発しようとしているところだったけど，釜山行きの

小さな汽船を捕まえた。三等席をとるしかなかったけど，それはその土地の汽船だったから，一等席にも白人用の食糧はないし，甲板で眠らなきゃならなかった。汽艇で急いで乗船し，トランクの一つは海に投げ出されたけど何とか取り返した。僕自身も毛布も荷物もぐしょぬれになって日本海を渡った。釜山に着いて，朝鮮人とジャップと船荷が空までうず高く積み上げられた小さな120トン級の仁川行きの汽船に乗った。たっぷり30度ほど右舷が傾斜したまま木浦に到着。シベリア号を作ろうと思えば，こんな汽船が200隻くらい必要だね。でも今朝，すべての先客と船荷がいやおうなしにお払い箱になって陸に上がった。というのは，日本政府がその汽船を使うといって没収したんだ。その前の晩は２隻の魚雷艇に護衛されながら航海したんだけどね。

さぁて，今朝お払い箱になって上陸した僕はこの平底帆船を借り上げて，５人の日本人乗客を乗せて，今まだ，ここ，つまり仁川へ向かう途上にいるよ。まあ，今までで一番過酷な仕事を引き受けちゃったね。数日何もニュースが入らないので，宣戦布告があったかどうかわからないし，仁川に着く，あるいは群山に着くまでわからないだろう。群山に着いたら乗客を降ろすんだけどね。ああ，白人が話すのをちょっと聞きたいね。24語ほどの範囲の語彙や大げさな身振りでは満足できないなあ。

1904年２月11日木曜日，

別の平底帆船に乗ったらもっと豪華になったよ。昼夜を問わず群山を目指して進んだ。昨日は危険な状態で，日本海上ではうなるような風が吹いていた。我々が風上に向かって航海しているのを見てほしかったね――一人は舵の柄につかまり，一人は帆足綱につかまり（この二人は朝鮮人だ），ジャップ４人はおびえているし，５人目は船酔いでおびえることもできないありさまだ。もちろん，僕らはこうしたことはクリアしたよ。でなきゃ君はこれを読んでいないからね。

帆が１本なくなり，舵が木っ端みじんになった後，夕暮れになって群山に到着。激しい雨の中，そしてナイフで切るような風の中到着した。それから，昨晩僕がずいぶん楽になったのを見てほしかったね―日本人の少女５人が着替えや入浴や就寝を手伝ってくれて，その間，僕のお客さんたちは楽しんでくれていた。そして少女たちが僕の美しい白い肌についてコメントしてくれたりといろいろあったよ。それに今朝も同じことが繰り返された―警察署長でもある群山の市長が市民を引き連れて僕の部屋を訪問したんだ。その間僕はひげをそり，着替えをして，食事をした。

町の主要な人間たちは皆僕を見送りに来て，励ましてくれて，何度も何度も「さよなら」と叫んだ。

新しい平底帆船には日本人が５人配置されていたが，誰もひとことも英語を知らなかったので，ここにおいて僕は彼らと一緒に朝鮮沿岸の海で波に漂っているということになった。

もう長い間白人のニュースに触れていない。このあたりに出回っている海戦や軍隊上陸のうわさは聞くが，疑いこそすれ信じるわけにはいかなかった。しかし，仁川に到着すれば，自分の置かれている状況がわかるだろう。

平底帆船で僕が旅している間は，君は寒くはないと思うかもしれないね。でも陸地には雪が積もっているし，北側の傾斜のところではところどころ水際まで雪が達しているんだ。

体を温めるストーブもないんだ―あるのは６本ほど小さな燃えさしの入った木炭箱があるだけだけど，笑っちゃいけないよ―僕は今その横にいるんだ。この木炭箱は，水の補給のために上陸した

ときに，ある村で朝鮮人から12ドル半で買ったものなんだよ。

1904年２月13日土曜日，

依然として野性的な生活だけど，あまり豪華ではないな。激しい吹雪の合間に見える陸や海の景色は豪華だけどね。お察しの通り，この沿岸の潮位は40フィートから60フィートに及んでいる（僕らは一万もの島々の真っただ中で今停泊中で，30里，つまり75マイル離れた仁川に向かって潮目が変わるのを待っているところなんだ）。

さて，潮流についてだがね。翌朝になってみると我々は，黄海全域にわたってたたきつける強風が襲う中，岩礁に挟まれて危険に瀕していた。我々が避難する唯一のチャンスは，どうしようもない中小さな湾をただやみくもに風上に向かって進んでいくことだったんだ。それで潮位40フィートのところで待たなきゃならなかったので，我々は，白波が砕ける小さな岩礁の下に錨をおろして待った。ついに潮位は上がり，白波が岩礁を覆い隠した。我々の平底帆船がやれたように平底船（クレージーなオープンボート）というものがいつでもやれると思ってはいけないよ。強風が雪を跳ね飛ばしてるんだ―どんなに寒いか想像できるだろ。しかし，日本人水夫がいたことを喜んだね。彼らは韓国人より勇敢で冷静で大胆だった。まあ，我々は午前11時まで待ったね。状況は危険に瀕していた―そこにとどまって，海に飲み込まれて，小さな湾めがけて帆走し，寄せ波に割り込んでいく危険に身をさらした。とてもじゃないが長くはとどまれなかったので，帆を１本立てて寄せ波に向かって突っ込んでいった。実は僕は，群山を出て以来収まっていたけどそれ以来強まってきていた頭痛のおかげで，ほとんど目が見えない状態だった。だから何が起きているかあまり気にしていなかったんだけど，でも，白い水しぶきが岩礁や砂州をあらわにする中であの湾口の砂州に入り込んだ時，上着を脱いで靴のひもを緩めたことを覚えているよ。そして，カメラを守らなきゃということについては何も気にしなかった

しかし，我々はやったよ―半分水につかったけど―やり切ったよ。風は一晩中ヒューヒューうなっていたわけじゃないけど，とても寒かったから風が海水を凍らせたね。

こんなことは全部，足首のことがなければ気になんかならないのにね。右足を左足でかばうようにしていたのだけど，左足を右足以上にぶつけてしまったので，（気を付けるのが不可能な場所で）つまりこんなひどい天候の中を狂ったように突き進む平底帆船の中では，いかに気をつけなければならないか想像できるだろう。とはいえ，今のところこれ以上ひどい捻挫は免れているよ。

狂った平底帆船，そう言わせてもらおう。ぼろ切れや腐ったものなどいつでも何かが押し流されていく中で―彼らの操船技術は奇跡だ。ハースト紙は僕が行方不明になったと思うかな。

1904年２月15日月曜日，

そうなんだよ，我々は何時間も待ったんだ！　４時間が経過した時，北風が吹き始めて，寒くて歯の感覚がなくなった。ひどい激潮の中で一晩中横になっていたが，平底帆船は右に左に傾いていて，頭痛もあって頭がおかしくなりそうだった。

午前４時には，雪のおかげで海の状態によって停泊地を変えなければならなくなった。

我々は何とも厳しい夜明けを目にしたが，８時には帆を１本挙げ，避難する場所を求めて帆走した。

我が水夫たちは荒々しく頑張ってくれて，我々は朝鮮のある漁村に泊まることになったが，そこでは水夫たちはいっそう荒々しくなった。我々はそこで日曜とその夜を過ごした―僕の雇った水夫５人と僕，それから男女と子供合わせて20人が小屋の一つの部屋に押し合いへし合い状態で詰め込まれた。その部屋の床面積は，ダブルベッド一つに相当するものだった。

そして僕の持っていたこの地から見れば異国の食糧が尽きてしまったので，僕はこの地の食べ物に手を付けなければならなくなった。無理やり詰め込んだ―汚物や不潔なものやそういった筆舌に尽くしがたいもの―を僕の胃袋が受け入れてくれればいいんだけどね。そして最悪だったのは，ひと口ひと口そういった汚物や不潔なものを食べるときにそのことを考えないではいられないことだ。

こういう村のいくつかでは僕は初の白人で好奇の的だった。

僕は夜中に一人の老人に自分の入れ歯を見せてやったよ。それを見て彼は家中の人を起こし始めた。僕は彼に悪夢を見せちゃったのかもしれないね。というのは，彼は朝の３時に僕のところに忍び込んで，僕を起こしてもう一度見せてくれと言ったからさ　この日の朝には，我々は仁川に向けて帆走していた。仁川に着くまでにくたばってしまわなければいいんだけど。

陸は雪に覆われていた。風の向きは再び進行方向にちょうど変わってくれたところだ。帆はしまわれて，男たちはオールで漕いでいる。風がまた吹き始めたら，非難する場所に向かってもう一度帆走するだろう。ああ，荒涼として厳しい沿岸部なんだ，この辺は。

1904年２月16日火曜日，仁川にて

今着いたところだ。装具一式―馬や通訳や苦力など―の用意をしているところなんだ。日本軍の軍事行動は鴨緑江に向けて北上し，おそらく満州に及びそうだ。

1904年２月17日，仁川にて

鴨緑江と，おそらく満州に侵入する軍事行動に合わせて，北に向かう準備をしているところだ。僕はそれについていくつもりで，だから通訳や苦力や馬やサドルや食料などの準備で忙しくしているんだ。外部の新聞記者は４人しかいない。残りの多数の記者はまだここに来れていない。

From *Jack London Reports* (1970). New York: Macmillan

『スロットの南側』

昔のサンフランシスコというのは，おとといの大地震まではいつも通りの場所だったサンフランシスコのことで，スロットの中ほどが分岐点になっている。スロットは，マーケット通りの中心に沿って走っている鉄の分け目のことだった。スロットからはギシギシする音が聞こえてきた。それは，ケーブルカーを引っ張り上げたり降ろしたりするためのケーブルの音なのだった。実際のところ，スロットは２本あったのだが，西部のすばやい言い方では単数の「スロット」と呼ぶことで時間の節約をしていた。スロットの北側には，映画館やホテル，ショッピングモールや銀行，立派な商社があった。スロットの南側には工場，スラム街，洗濯屋，機械組み立て工場，ボイラー工場，

労働者階級の住宅街があった。

スロットは，社会の分裂を意味する隠喩（メタファー）として使われていた。誰もこの隠喩（メタファー）に反対するものはいなかったし，この言葉が行き交い，フレディ・ドラモンド以上の成功を収めていた。彼は両方の世界で生計を立てていた。同時に，彼は上手に二つの世界での生活をこなしていた。ドラモンドは，カリフォルニア大学の社会学部の教授で，社会学の教授として初めてスロットを越えた人物だった。彼は巨大な労働スラム街に６か月間住み，『未熟な労働者たち』という本を執筆した。この本は文学の進歩にとって有益な貢献をし，また，不満の文学への素晴らしき答えになるものとして様々なところで認められた。政治的，かつ経済的な視点からすると，この上なくオーソドックスなものだったので，すばらしい本だとは言えなかっただろう。有名な鉄道会社の社長たちはこの本のすべての版を購入し，従業員に読ませたのだった。製造業連盟だけでも５万部を配布したのだ。ある意味，この作品は，悪名高いとして広く知られている『ガーシャへのメッセージ』と同じぐらいに不道徳なものだった。同時に，倹約と満足について致命的な説き方をしているという点では『キャベツ畑のウィッグ婦人』にも似通っていた。

初めは，フレディ・ドラモンドにとって労働者たちと仲良くやることはひどく難しいことだと思っていた。ドラモンドは労働者たちのやり方に慣れていなかったし，彼らももちろんドラモンドに慣れていなかった。労働者たちは彼のことを怪しんでいた。彼の身元もわからず，ドラモンドも自分の前職について語ることはできなかった。彼の手は柔らかかった。ドラモンドの並外れた礼儀正しさは，労働者たちにとって不吉なものだった。彼が果たすべき役割として最初に思いついたものは，説明なしに手だけで労働する自由で独立したアメリカ人でいることだった。しかし，そうはいかなかった。彼はそのことがすぐに分かった。労働者たちが本当に一時的に彼を受け入れ始めたのも，変人としてだった。少しすると，ドラモンドは徐々に自分の状況をわかり始め，彼は気づかぬほど少しずつ自分の仕事の役割をこなすようになっていた。というのも，ドラモンドは以前にはもっともっと良い日々，比べものにならないぐらいに良い日々があったのに，彼の運は悪くなってきていた。だけれども，それは確実に一時的なことだった。

ドラモンドは多くのことを学び，頻繁に間違った抽象化をしていた。これらのことはすべて『未熟な労働者たち』からわかることなのだ。彼は自分自身を守っていたけれども，ドラモンドという人間には分別があり，かつ保守的なやり方で，自分の抽象化を「仮説」として名付けた。彼の初めての経験は，小さな荷造り用のケースを作るという出来高払いの仕事をした巨大なウィルマックス缶詰工場でのことだった。箱工場が部品を供給し，フレディ・ドラモンドのすべきすべてのことは，型に合わせて部品を組み立て，金づちで丸くぎを打ち込むことだった。

これは特別な訓練を必要とするような仕事ではなかったけれど，出来高払いの仕事だった。この工場の普通の労働者たちは毎日１ドル50セントをもらっていた。フレディ・ドラモンドは，他の男性が同じ仕事をゆっくりとこなしながらも１日に１ドル75セントを稼いでいることがわかった。３日目にやっと他の人と同じだけ稼げるようになった。けれど，彼には野望があった。彼はただゆっくりと仕事をこなすことは好きではなかったし，異常に能力があって調子もよかったので，４日目にやっと２ドルを稼いだ。次の日には，心身が疲れるほど緊張していて，２ドル50セント稼いだ。彼の仕事仲間は彼に対して，しかめっ面で不機嫌な顔つきをしていて，ボスにおべっかを使っているとか，足並みをそろえようとしているとか，雨が降り始めても歩調を落とさずにいると批判して

いた。彼らはそんな批判を彼が理解できないような俗語で話していた。ドラモンドは出来高払いの仕事において彼らが仮病を使っていることに驚き，未熟な労働者たちの生まれつき備わっただらしなさなのだと一般化した。次の日には，３ドルの価値のある箱に金づちを打ち始めた。

そしてその夜，缶詰工場から出てくると，彼は同僚の男性に問い詰められた。その男は非常に怒っていて，支離滅裂に俗語を話していた。ドラモンドはその男の行動の背後にある目的を理解できなかった。行動自体が非常に激しかった。彼が自分のペースを落とすことを拒み，契約の自由さ，自由なアメリカ主義，そして労働の尊厳について泣き言を言うと，仲間の労働者たちはドラモンドの足並みをそろえる能力を台無しにした。それは獰猛な戦いだった。ドラモンドは大柄な男性でスポーツマンだったけれど，連中がついに彼のあばら骨に飛び乗ってきて，顔の上を歩いて，指を踏みつけた。そのため，一週間もベッドに横になったあと，彼はやっと起き上がり，他の仕事を探すことができた。こうしたすべてことについては，彼の初めての本『労働者の圧政』で述べられている。

しばらくしてドラモンドは，ウィルマックス缶詰工場の別の部署で，女性たちに囲まれてフルーツ販売員として働いた。彼が１回でフルーツの箱を２箱運ぼうとすると，即座に，港でフルーツの荷を船に積んだり降ろしたりする労働者たちに非難された。彼らがドラモンドの行動を非難することは，明らかにサボるための仮病だとわかっていた。けれど，彼自身はここにいるし，観察するためにも決して状況を変えないということを決心していたのだ。だから，ドラモンドはその後，文句も言わずに１箱ずつ運ぶことを受け入れた。ただ彼は怠けるための技を学ぶことができたので，そのことについて特別な１章を書いた。そして，最後の章は試験的に抽象化したものを書いた。

６か月間で彼は，多くの仕事をして，上手に本物の労働者の真似ができるようになった。彼は生まれつきの言語学者で，メモを取りながら労働者のスラングや隠語について研究し，ついに彼はかなり明瞭に労働者の言葉を話せるようなった。また，言語を通して労働者たちの精神的プロセスが理解できたし，彼と労働者たちが親密になることで，のちの本に予定している章のデータを集める手段になった。その章は「労働者階級の心理の統合」というタイトルを付けようとしていた。

彼は，下層社会への最初の突入から表に出てくる前に，自分が素晴らしい役者で，明らかに性格を適応させる天性があるということに気づいた。彼も自分自身で驚くほどの変わりやすい人だった。ひとたび言語を習得すると，気難しい不安も克服し，労働者階級の暮らしのどんなひと目につかない所でも流れに乗ることができ，家のように快適に過ごし，きちんと労働者階級に合わせることができると思った。２冊目の本『労働者』の序文で彼は，本当に労働者階級の人達について知ろうとし，可能な限り，これを達成するために，彼らのそばで働き，食事を共にし，寝床も共にし，余暇を楽しみ，彼らの思考について考え，気持ちを汲み取ったのだと述べている。

ドラモンドは物事を深く考える人ではなかった。新しい理念についても信用していなかった。すべてにおける彼の水準や基準は型にはまっていた。彼のフランス革命に関する論文が大学の紀要で注目すべきものになったのは，その論文が，労力のいる執筆作業で内容が充実していたからだった。というのも，これまでにフランス革命について書かれたものは，無味乾燥で感受性がなく，非常に形式的で，かなりオーソドックスで長ったらしい話だったからだ。ドラモンドはとても控え目な男だったし，生まれつき引っ込み思案なところは相当なもので，心も鋼のように強かった。彼にはほとんど友人がいなかった。あまり感情を表に出したがらず，そして無関心だった。不道徳さもなけ

れば，誰もが見つけるような誘惑さえも見つけられなかった。ドラモンドはタバコがとても嫌いだし，ビールも大っ嫌いだった。だから，彼が時々夕食の時に飲む軽めのワインよりも強いアルコールは飲んだことがないということはよく知られていた。

大学１年生の時，ドラモンドはやんちゃな仲間たちによって「冷蔵庫（アイスボックス）」とあだ名を付けられていた。大学の教授たちの中では「冷蔵（コールドストレージ）」として知られていた。彼がただ一つだけ悲嘆にくれていたのは，「フレディ」という呼び名だった。それは彼が大学のフットボールの後衛でプレーしていた時のことで，彼の型にはまったような精神からすると，時と共に忘れられるようなことではなかった。公の場は別としても，いつも「フレディ」と呼ばれることになるだろうし，恐怖感を持って将来のことをのぞき込んでみても，自分は社会から「オールド・フレディ」として語り継がれることになるだろうと考えていた。

ドラモンドにとって，27歳という若さで社会学の博士になることはあまりにも早すぎた。それに，彼は年齢よりも若く見えた。見た目や雰囲気は，背が高くてがっしりした研究者で，ひげがなく，場慣れしていて，純粋で，気取らなくて，健康的で，並外れたスポーツマンで記録保持者として知られていて，ある種の抑制された教養を自分の内に秘めていた。彼はクラスや会議室以外では，決して自分の専門の話をしなかった。けれど，後にドラモンドの本が彼が不愉快に思うほどに公の目に触れたりして，文学会や経済学会で特別な彼の論文を発表する程度のことはした。

彼はすべてうまくいった―あまりにもうまく行き過ぎていた。身なりも行動も必ずその場に相応しいものだった。それでもこの男はダンディーではなかった。ダンディーからはかけ離れていた。彼は研究者で，高等教育の慣習からは外れたように気前が良かったが，やっぱり今はやりの連中と似たようなものだった。彼の握手は十分に強く，きつかった。彼の青い目は冷たい青で，説得力のある誠実な目をしていた。彼の声は，きっぱりとした声で男らしく，明瞭で発音の仕方もテキパキとしていて，耳に心地よい声だった。フレディ・ドラモンドの唯一の欠点は，感情を表に出さないことだった。彼は決して打ち解けることはなかった。フットボールをしていたころ，試合が熱くなればなるほど，彼は冷めていった。ドラモンドはボクサーとしても注目されていたけれど，考えずに行動する人だとも思われていたし，距離感やパンチのタイミング，ガードやブロック，時間稼ぎなど，機械的で超人的な精度だった。彼はめったに相手を乱打することはなかったし，めったに自分自身も乱打されることはなかった。自分が思っているより１回のパンチに体重をかけなかった。かなり賢くて，落ち着きもあったから，彼は自分が意図しているより１ポンド以上の体重をパンチに乗せるような無理はしなかった。ドラモンドにしてみれば，体の問題だったし，そうすることで彼の調子もよかった。

時が経つにつれて，フレディ・ドラモンドはこれまで以上に頻繁にスロットを越えて，マーケット通りの南側に消えた。彼は夏休みと冬休みはそこで過ごし，それが平日であろうと週末であろうと，貴重かつ楽しい時を過ごした。それに，スロットの南側にはあちこちからたくさん集められる本の材料があった。ドラモンドの３冊目の本は『庶民と支配者』というタイトルでアメリカの大学の教科書になった。彼がそのことについて知るほんのつかの間に，彼は４冊目の本『無能な詭弁者たち』という本に取り掛かっていた。

彼の性質にはどこか変にひねくれて，風変りなところがあった。おそらくそれは，彼が自分の環境やこれまでの教育，そして祖先の混ざり合った血統に対しての反動だったのだ。というのも，ド

ラモンドは先祖代々学者の家系だった。彼は労働者階級で楽しむことを覚えていった。彼がいた元の世界では，彼は「凍結」していた。けれど下層社会に行くと「ビッグ」ビル・トッツになって，酒も飲めるし，タバコも吸えるし，スラングも言いながら戦える，そんなこんなで一番人気になった。みんなビルが好きだったし，誰よりも労働者階級の女性たちが彼の虜になった。初めは，彼は単なる名優に過ぎなかったけれど，時が経つにつれて，見せかけが第二の天性になった。もはや役者の域を超えていたのだ。彼はソーセージが大好きでソーセージ・ベーコンも好きだった。しかし，自分の元の世界では，これらの食べ物程ひどく嫌いなものはなかった。

物事をするのは必要だからするということから，彼は物事を大義のためにするようになった。時が経つにつれて，自分の講義室に戻ると，自分の感情を抑制することを遺憾に思うようになった。そして，彼はスロットを越えて，自由の身となり，めちゃくちゃになれる時が来ることを心待ちにしていた。彼には不道徳な心はなかったけれど，「ビッグ」ビル・トッツのように，フレディ・ドラモンドが決してすることを許されなかったような無数のことをした。しかし，フレディ・ドラモンドは決してこんなことはしたくなかった。そして，このことが彼の発見の奇妙な部分だった。フレディ・ドラモンドとビル・トッツの二人は完全に違う人間だった。両者の願望，嗜好，衝動は互いに相容れなかった。ビル・トッツが明らかにただ良心だけで仕事をこなしていたことに対してフレディ・ドラモンドは，悪意があって，犯罪的で，そしてアメリカ的ではないことだと非難した。そんな悪事に対する批判が何章かに述べられていた。フレディ・ドラモンドは踊ることが好きではなかったが，ビル・トッツは決してマグノリアやウェスタン・スターやエリートのような様々なダンシングクラブでの夜のことを忘れることはなかった。そして，肉屋の労働者たちの毎年恒例の仮面舞踏会で最優秀仮装者になり，喉を乾かしながら立ち尽くすも，30インチの銀カップをゲットした。フレディ・ドラモンドがとりわけ禁欲主義を楽しんでいる間に，ビル・トッツは女性たちが好きで，彼女たちもまた彼のことが好きだった。ビルは平等参政権に対して反対であることを明らかにしていた。それに，彼が皮肉にも男女共学について隠れて非難する程度は痛烈なものだった。

フレディ・ドラモンドは努力もせずに，彼の身なりのスタイルを変えた。彼が変装するために使っていた人目につかない部屋に入ったとき，少しだけ堅苦しく振舞った。彼は直立しすぎていたから，肩が少しのけぞり過ぎていた。それに顔は真顔で，ほとんど無表情で，本当に表情に乏しかった。しかし，ドラモンドがビル・トッツの服装で現れた時には，別人だった。ビル・トッツは前かがみになっていたけれど，どこか全身がしなやかで，上品だった。彼の声色は変わって，当然のように彼の唇から不明瞭な話し方が出てきたり，時には，宣誓のように話したりしながらも，笑い声は腹の底から出したように高い声だった。また，ビル・トッツは遅い時間になると少し体を傾けて，時には，バーで他の労働者たちと気さくに喧嘩をするような態度も取っていた。そしてまた，日曜日のピクニックやショーから家に帰ってくる時，慣れた様子でうまく女性たちの腰にさっと両腕を回すと，クラスの気の知れた仲間に期待されるいちゃつきのからかいを受けながらも，楽しくて鋭いウィットをあらわにしていた。

もう完全にビル・トッツになっていたし，労働者だし，正真正銘のスロットの南側の住人だった。それに，他の人の平均ぐらいの階級意識の強さを持っていた。非組合員に対する彼の憎悪でさえ，忠実な労働組合員以上のものだった。ウォーターフロントのストライキの間にフレディ・ドラモンドは，どういう訳か，唯一の連合体から孤立することができたし，冷静に批評することもできたが，

ビル・トッツの方は浮かれ騒いでいる怠け者の非組合員の湾岸労働者を見ていた。ビル・トッツについては，港湾労働者組合のメンバーとして会費を納めていたし，彼の仕事を奪った人に異議申し立てをする権利があった。「ビッグ」ビル・トッツはとても傲慢かつ，有能で，問題が起きた時には「ビッグ」ビルが先頭に立っていた。怒りの感情を演じることから，フレディ・ドラモンドは，ビル・トッツとしての別の自分の役割を通して，正真正銘の怒りを経験することができた。控え目にそして保守的に，彼の下層社会での経験について抽象化し，熟達した社会学者として自分の経験を文字に起こすことができたのは，彼が大学の典型的な雰囲気に戻ったときだけだった。ビル・トッツは階級意識を超えるほどの客観性に欠けているということを，フレディ・ドラモンドは明らかにわかっていた。しかし，ビル・トッツはそれがわからなかったのだ。非組合員が彼の仕事を奪おうとした瞬間，ビルは顔を赤らめかっとなるものの，他には何もわからなかった。フレディ・ドラモンドとは，服装も場に応じていて態度もしっかりとしていて，自分の研究室の机に向かっているか，「社会学17」のクラスの講義をしているような人物だったのだ。それに，非組合員と労働組合に関する労働者問題や，そういうものと世界市場競争におけるアメリカの経済繁栄との関係についてわかるのもまたフレディだった。ビル・トッツは，実際のところ，次の食事のことと，ゲイティー運動クラブでの翌晩のボクシングの試合のこと以上のことなんて考えられなかった。

ドラモンドが労働者階級の世界にいる危険性について初めて警告を受けた時，ちょうど，『女性たちと労働』の材料集めをしていた。彼は両方の世界での生活をあまりにも成功させ過ぎていた。ドラモンドが育んだこの変わった二重性は結局のところ非常に不安定で，研究室で物思いにふけっていると，彼にはこの状況は長くは続かないだろうと思うのだった。今こそまさに転換期だったし，もし彼が何かに固執したら，一方の，もしくは両方の世界にいることを辞めなければならないだろう。この男はやっぱり両方の世界に居続けることなんてできないんだ。そこで，彼が回転書棚の上の段の棚に飾ってある本，それは彼の論文から『女性たちと労働』までが並べられていたが，これらの本を見ながら，自分は社会に固執し，忠実であろうと決心した。ビル・トッツは自分の目的を守っていたが，彼はあまりにも危険な共謀者になっていた。もうビル・トッツをやめる時が来ていたのだろう。

フレディ・ドラモンドの恐ろしさは，メアリー・コンドンのせいだった。彼女は，第974代国際手袋労働組合の組合長だった。彼は以前から彼女のことを北西労働連合の年次大会の傍聴席で見ていたし，ドラモンドはビル・トッツの目を通じて彼女のことを見ていた。彼の個性はメアリーに好印象を与えていた。彼女は，フレディ・ドラモンドの類の人物ではなかった。もし彼女がヒョウのような優美さと強靱さを持ち合わせて，笑いに溢れ愛で満たされた驚くべき燃えるような黒い目をしていて，気分屋で，高貴な血筋だったとしたどうなるだろうか。フレディ・ドラモンドはあまりにもバイタリティのありすぎる女性，それに…そう，自己制御できない女性たちのことをひどく嫌っていた。ドラモンドは進化論を受け入れていた。というのも，進化論は至る所で研究者たちによって受け入れられていたし，彼ははっきりと，人間は混乱したごちゃごちゃ状態の中から，そして進化の底辺にいる奇怪な有機物のめちゃくちゃな状態の中から抜け出して生命のはしごを駆け上がってきたのだと信じていた。しかし，彼は自分のこんな系統はつまらないものだと恥じていたし，そもそも考えたくなかった。どういうわけか，彼は鉄のように心の抑制を繰り返し行い，そのことを他人にも教え，自身の思い描くタイプの女性を好んでいた。彼の理想とする女性とは，下品で痛

ましい祖先から系統をはねのけて，規律と自己抑制によって，自分たちと頭の鈍い祖先とを分けている大きな隔たりを強調することができる人だったのだ。

ビル・トッツはこのようなことをよく考えることはしなかった。彼は，集会場で初めて自分の目が彼女に向いたあの瞬間からメアリー・コンドンのことが好きだった。彼は決まって彼女がどんな人物なのか，正体を見破ろうとした。ビルがメアリーに次に会ったのは突然のことで，ちょうどパット・モリシーのために特急荷馬車を走らせている時だった。彼女を見かけた所は，ミッション通りの下宿所があるところで，彼がその場所に呼ばれたのはトランクを倉庫に持って行くためだった。女家主の娘がビルを呼び付け，小さな寝室に行かせた。その場所の居住者は手袋を作っていた人で，その人は病院に移ったばかりだった。しかし，ビルはそのことを知らなかった。彼は身をかがめて，大きなトランクを肩に乗せ，ドアの方に向かって重い足取りで進んだ。その時，彼は女性の声を聞いた。

「組合に所属してるの？」と質問された。

「なんだって？」と彼は言い返した。「あっちへ行くんだ。どくんだ。俺は向きを変えたいんだ」

彼が気づいた時，自分の体が大きかったので，グルグル回ってふらっとよろめいて，トランクが不安定になって，結局壁にぶつかってしまった。彼は汗をかきはじめたけれど，同じタイミングで，メアリー・コンドンのキラキラした，怒りの目をのぞき込んでいた。

「もちろん，僕は組合に所属しているさ」彼は言った。

「ほんの冗談だよ」

「あなたのカードはどこにあるの」

彼女は素っ気ない態度で，事務処理のように見せることを要求してきた。

「ポケットの中だよ。だけど，今は出せないね。この荷物があまりにも重すぎるんだ。荷馬車と一緒に降りてきてくれよ。そしたら君に見せてあげるよ」

「荷物を降ろして」と彼女は命令してきた。

「なんでだ。僕はカードを持ってる。本当だぞ」

「降ろして，それだけ。組合員じゃない人は荷物を運べない。あなたは自分自身を恥じるべきよ。あなたは卑怯者で，正直者の人達の上に立って非組合員として働いている。どうして組合に所属せずに，そんなに普通の人でいられるの？」

メアリー・コンドンの表情はそのままだったが，明らかに彼女は激怒していた。

「あなたみたいな傲慢な人があなたの階級で裏切り者になったと考えてみてよ。あなた，次のストライキで組合の馬乗りを打ち落とすために市民軍に入隊しようって企んでいるんでしょ。そんなことより，あなたはもうすでに市民軍に所属しているかもしれないわね。もう，あなたって人は…」

「待て待て，もう十分だ！」

ビルは大きな音を立てながら荷物を床に落とし，まっすぐに姿勢を正し，コートのポケットに手をやった。

「僕は君に冗談を言っていただけだ。ほら，これを見るんだな」

それは，ちゃんとした組合のカードだった。

「分かったわ。じゃあ，それを持って行って」メアリー・コンドンはそう言った。「次はもう，冗談を言わないで」

彼が肩に大きなトランクを乗せたことで一安心して，彼女の表情は緊張がほぐれていたし，目をキラキラとさせ，この品がよく体格のいい男性をちらりと見た。けれど，ビルは見なかった。彼はトランクを運ぶことで忙しかったのだ。

次に彼がメアリー・コンドンを見たのはランドリー・ストライキの時だった。クリーニング店の労働者たちによって作られたその組合は最近組織されたばかりでまだ経験が浅く，メアリー・コンドンはストライキの監督として要請されたのだった。フレディ・ドラモンドは，何が起こるかをうすうす感づいていて，ビル・トッツを組合に加入させ，調査させた。ビルの仕事場は洗濯場だった。あの朝は仕事場で男性が，初めに出勤させられた。というのも，女性たちの勇気を奮い立たせるためであった。そして，メアリー・コンドンが入り始めた時，ビルはしわ伸ばし器の部屋のそばにいた。大きくて，恰幅のよい工場長が彼女を締め出した。彼は女性たちを呼び集めるつもりなんてなくて，でしゃばるなとメアリーに教えようとした。そして，メアリーが工場長を押し出そうとすると，太った手で彼女の肩に手をやり背中を押し出した。彼女はぐるっと回って，ビルを見た。

「ここにいたのね，トッツさん」彼女は名前を呼んだ。「手を貸してちょうだい。私は中に入りたいの」ビルにとっては心臓が驚き飛び出るほどの経験だった。

彼女は彼の組合のカードに書かれた名前を憶えていた。次の瞬間，工場長が法の下での権利についてうわごとをいいながら出入り口からぐいっと引っ張り出されて，その間に女性たちは機械を壊していった。短時間で上手くいったストライキが終わるまでの間で，ビルはメアリー・コンドンの子分として，また使者を自ら買って出た。フレディ・ドラモンドは大学に戻ると，どうしてビル・トッツがメアリーのような女性に美点を見出せるのだろうかと考えていたのだった。

フレディ・ドラモンドについては全く問題がなかったが，ビルは恋に落ちていた。この事実から逃れることはできなかったし，フレディ・ドラモンドに警告を与えるようなものだった。そう，彼は自分の仕事をこなし，冒険は中止することだってできた。再びスロットを越える必要性はなかった。最新版の本『労働者の戦法と戦略』の最後の３章は終わっていて，ドラモンドはそれらの章を埋め合わせるだけの十分な材料は持っていた。

彼が到達したもう一つの結末は，最後の頼みの綱としてフレディ・ドラモンドとしての自分を救うために自分の生きている社会の片隅でもっと親しい絆や人間関係が必要だということだ。彼はそろそろ結婚する時期だった。とにかく，彼が十分に気付いていたことは，フレディ・ドラモンドが結婚しなければ，ビル・トッツは確実に結婚するだろうし，こんな状況になってしまうと，考える間もなく複雑になってしまうのだった。そこに，キャサリン・ヴァン・ヴォーストが入り込んでくるのだ。彼女は学生で，父親は，学部の裕福なメンバーの一人で，哲学学部の学部長だった。婚約が完全なものになり，発表された時，フレディ・ドラモンドは賢い結婚になるだろうと結論づけた。外見は冷淡で，内気で，上流階級の出身で健全で保守的なキャサリン・ヴァン・ヴォーストには，どこか温和なところがあったけれど，彼女はドラモンドと同等の心の抑制を持っていた。

すべてうまくいったようだったが，フレディ・ドラモンドは下層社会からの呼び掛けを振り払うことはできなかった。自由でオープンで，スロットの南側では阻止するものもなく責任もない生活の魅力を振り払うことはできなかった。結婚の時になり，彼は本当に誘惑に負けてしまったと感じたし，その上，陰気な講義室と地味な夫婦生活に落ち着く前に，もう一度，自分勝手に過ごし，気の知れた仲間やろくでなしたちと一緒にいられたらと思っていた。そして，彼がもう少ししようと

思っていたのは，『労働者の戦法と戦略』の本当に最後の章で，ほんの少し重要な情報を集めれば書けたのに，それを怠ったために書かずじまいになっていたことだった。

だから，フレディ・ドラモンドは，ビル・トッツとして最後に降りて行って，データを得た。そして，運悪く，またメアリー・コンドンに出くわした。ひとたび彼が研究に落ち着き，スロットの南側でのことを振り返ってみることは嬉しいことではなかった。彼の警告は二重に避けられなくなった。ビル・トッツはひどい振舞いをした。メアリー・コンドンに中央労働評議会で会っただけでなく，家に帰る途中で彼女と肉料理店に立ち寄り，カキもごちそうした。それに，彼女の部屋のドアの前で別れる前に，ビルの腕が彼女に回り，唇にキスをして，彼女もまたキスを繰り返した。そして，彼の耳にそっと聞こえてきた彼女の最後の言葉，それは喉から気まぐれにむせび泣きながらも優しく発せられる言葉で，愛を叫ぶのと同じぐらいの「ビル…親愛なるビル」という声だった。

フレディ・ドラモンドは，このことを思い出して身震いした。彼は自分が大きなあくびをしているとわかった。彼は生まれつきの一夫多妻主義者ではなかったし，彼はこの状況の可能性にぎょっとさせられたし，そろそろ二つのうち，一方を終わりにしなければならなかった。というよりむしろ，彼はビル・トッツのすべてになって，メアリー・コンドンと結婚するか，もしくは，完全にフレディ・ドラモンドのままでいて，キャサリン・ヴァン・ヴォーストと結婚するかだった。さもなければ，彼の行為は軽蔑するにも値せずひどいものになるだろう。

何か月か過ぎて，サンフランシスコは労働紛争によって引き裂かれた。組合と労働者協会は，あたかもどちらかがどうにかして問題を解決するつもりであるかような強い決意を持っていた。しかし，フレディ・ドラモンドは校正をしたり，クラスで講義をしたりして，身動きを取ることはなかった。彼は自分自身をキャサリン・ヴァン・ヴォーストに捧げていた。日に日に彼女のことを尊敬し賞賛するようになっていったし，それどころか，彼女に対して恋に落ちていた。市電のストライキが彼を誘惑しようとしたけれど，彼が予想しているほどその誘惑はさほど強くはなかった。そして，大きな肉ストライキが起こっても，彼の興味はそそられなかった。ビル・トッツの影はうまく打ちのめされて，フレディ・ドラモンドは若返り，熱意を投じて，長年温めてきた「収穫逓減」のトピックに取り組んだ。

結婚式が二週間先になったある日の午後，サンフランシスコで，キャサリン・ヴァン・ヴォーストが彼を車に乗せ，最近，彼女が興味を持つ奉仕事業家たちによって設立されたボーイズクラブを見に連れて行った。それは，彼女の兄の車だったけれど，乗っていたのはお抱え運転手を除いて二人だけだった。カーニー通りの交差点で，マーケット通りとゲーリー通りが「V」の字のごとく曲がるように交差していた。彼らは，車に乗っていて，マーケットのほうから「V」字を上手く下ってきて，ゲーリーのほうに近づいて行った。しかし，彼らはゲーリーからどんなものが下ってきているかなんて知らなかったし，「V」字の頂点で彼らは結局出くわす運命だったのだ。ちょうど肉ストライキの最中で，それに，かなり激しいストライキだということを新聞で知ってはいたものの，その時のすべてのことはフレディ・ドラモンドからしてみれば考えられないことだった。僕はキャサリンのそばに座ってるんじゃないのか？ それに，彼女のそばで，丁寧に，奉仕事業とビル・トッツの冒険がその活動を前に進める役割を果たしているという見解を話しているところなんだよね。

ゲーリー通りに下りてくると，６台の馬車がいた。それぞれの非組合員の運転手の横には警察官が座っていた。行列の前後左右には，多くの警察官たちがエスコートをするように行進していた。

しんがりを務める警察官の後ろでちょうど良い距離をとって，整然と集まってはいるがやかましい民衆がいくつかのブロックにわたって伸びており，歩道から歩道までいっぱいに広がっていた。食肉企業合同はホテルを占拠しようと試みていたし，ついでに，ストライキをやめようとしていた。聖フランシス・ホテルはすでに応じていたし，多くの窓が壊され頭までも割られ，そして，遠征隊はパレス・ホテルへと救助に向かっていた。

何も意識しないうちに，ドラモンドは隣保事業について話をしているキャサリンのそばに座り，自動車は，整然と警笛を鳴らし，渋滞を避け，豪快に大きな曲線を描いてＶ字の先端を曲がろうとした。石炭をいっぱいに詰め込んだ大きな運搬用馬車が，４頭の馬に引かれて，あたかもマーケット通りから折り返したように，ちょうどカーニー通りから出てきて，彼らの道をふさいでしまった。馬車の馬乗りは決心がついていないように見えて，お抱え運転手のほうはゆっくりと走っていたけれど，通りを横切る警察官の警告の叫び声も無視して交通ルールに違反しながら，馬車の前に出るために，左のほうに急に車のハンドルを切った。

その時，フレディ・ドラモンドは話すのをやめた。彼は再び話し始めることはしなかった。というのも，この状況はドラマの変身シーンのように急速に変化していたのだ。彼は後ろのほうで，民衆のわめき声を聞き，ヘルメットをかぶった警察官をちらっと見て，急に馬車がよろめいた。同時に，石炭を運ぶ馬車の馬乗りはむちを打ち，仕事に立ち向かった。進んでいる行列の前に行くよう馬を急がせ，即座に馬を止め，大きなブレーキをかけた。そして，彼はブレーキの取っ手に綱をしっかりとかけて，絶対に動かないぞ，というように座っていた。自動車も息を切らした指導者たちによって止められていた。

お抱え運転手たちが完全に戻る前に，年老いたアイルランド人が，がたがたする特急荷馬車を操縦していて，ギャロップで出かけて，自動車に鍵をかけてしまっていた。そのアイルランド人はパット・モリシーだった。反対側では，醸造所の馬車が石炭を乗せた馬車のせいで動けなくなっていた。東行きのカーニー市電はワイルドに汽笛を鳴らしながら，運転手は行き来する警察官に大声を上げ，封鎖を破ろうと猛進していた。そうこうしていると，次々と馬車が動けなくなり，道をふさいで混乱状態になった。食肉用運搬馬車が停止した。そう，警察官は罠に引っかかったのだ。民衆が攻撃してくると，背後の方から怒号がますます聞こえてきた。一方，警察官の先発隊は，道を妨害している馬車に突撃した。

「僕ら，ひどいことに巻き込まれたな」とドラモンドはキャサリンに冷静に言った。

「そうね」と彼女はうなずいたが，冷静だった。「なんて残忍な人たちなのかしら」

彼女に対する彼の敬服の気持ちは倍になった。彼女は実に彼にとってドンピシャの人だった。たとえ，彼女が叫んで彼にしがみつこうとも，ドラモンドは彼女に満足していた。けれど，これこそ偉大なことじゃないか。彼女は，あたかもオペラでの交通止めに過ぎないかのように，冷静に嵐の中で座っていた。

警察官たちは，道路を一掃しようと奮闘していた。ワイシャツ一枚の大きな石炭用運搬馬車の馬乗りはパイプタバコをふかして，座ってタバコを吸っていた。彼にとりとめないことを言ったり，彼に向って災いあれと罵倒する指揮官をのんきにちらちらと見たりしていた。そして，馬乗りの彼が唯一していたことは，肩をすくめることだった。後ろのほうから棍棒でバンバンと頭を打たれる音がしたり，ののしったり大声をあげたり怒鳴ったりする人たちがいて，あたりは修羅場になって

いた。騒音が近づいてきていることは，民衆が馬車から非組合員を引きずり降ろしているということを示していた。指揮官が，前衛から補強して，後方の民衆を追い払った。その間に，右側の高いオフィスビルのどの窓も開けられて，階級意識の強い会社員たちが，警察官や非組合員の頭にオフィスの機材や用具を雨のように降らせていた。くずかごやインクつぼ，文鎮，タイプライター，なんでも手に入れられるものすべてで宙を埋め尽くした。

指揮官の命令の下で，警察官たちは石炭用運搬馬車の高い座席を這うように進んで行き，馬乗りを逮捕しようとした。そして，馬乗りたちはゆっくりとそろそろと上がっていくと警察官に対峙し，突然腕をつかんで，指揮官の方に向かって引きずり降ろしてもみくちゃにした。馬乗りは若くて巨体だったが，積み荷に上りつめるかと思われた時，両手に石炭の一塊を持って身構えると，横から荷馬車に登ろうとしていた警察官が手を放して地面に崩れ落ちた。指揮官は半分の部下に運搬馬車を奪うよう命令を下した。馬乗りは，積み荷の上を左右によじ登って，大きな石炭の塊を警察官たちに振り落とした。

混雑した歩道と停止した運搬馬車の馬乗りたちの間では，激励と喜びの声が飛び交っていた。市電の運転手は，制御棒でヘルメットをかぶった警察官たちをなぐったため，彼らは意識を失って，プラットフォームから引きずり降ろされた。自分の部下を撃退された指揮官は，石炭用運搬馬車の上で次の攻撃をさせた。20人の警察官たちが高くて強固な荷馬車をよじ登っていた。しかし，馬乗りたちは強さが増していた。たまに，ワゴンの下や舗装された道路の上で転がっている７，８人の警察官たちもいた。馬乗りは，強固な荷馬車の後ろの端からの攻撃を追い返すことに没頭し，その後ぐるりと向きを変えた。すると，前方の端から席の方へと歩いていこうとしている指揮官を見た。彼はまだ無防備で，平衡を保つには非常に不安定だった。その時，馬乗りが指揮官に30ポンドの石炭の塊を投げつけた。その塊が指揮官の胸に命中し，彼は後方にひっくり返って，荷車の後ろに当たって，地面に倒れた。そして，自動車の後輪にぶつかってしまった。

キャサリンは，指揮官が死んだと思った。けれど，彼は自分で起き上がり，飛びついてきた。彼女は手袋をはめた手を伸ばして，鼻息を荒立ている馬の横腹を軽くたたき，馬をゆすった。しかし，ドラモンドは，この行動に気付かなかった。石炭用運搬馬車で起きた戦い以外は何も見ていなかった。どこか彼の複雑な心理の中で，あのビル・トッツが意識を取り戻そうとしていた。ドラモンドは法や命令，規定を保つことを信じていたけれど，心の中にある暴動を起こすような凶暴さは，そのことを拒否しようとした。そして，もしそうだとしても，フレディ・ドラモンドは，ビルを守るためにも鉄のような心の抑制を奮い立たせなければならなかった。しかし，聖書でも述べられているように，家の中で争っていては家自体が成り立たないのだ。フレディ・ドラモンドは，自分の中で自分の意志と力がビル・トッツのものと分裂している。そして，二人の間では二人を構成するものが存在し，ぐいっと捻じ曲げられつつあった。

フレディ・ドラモンドは，自動車の座席に座り，しっかりと心を落ち着かせ，キャサリン・ヴァン・ヴォーストのそばにいた。けれど，フレディ・ドラモンドの目は外を見ていて，その先にはビル・トッツがいた。どこかその目の裏側には，彼らの共通の体をコントロールする，まともで保守的な社会学者のフレディ・ドラモンドと，階級意識をもつ好戦的な労働者であるビル・トッツがいた。石炭用運搬馬車の戦いの必然的な終わりを見ていたのは，ビル・トッツだった。ビルは，荷台の上にいる警察官を２，３人見た。彼らは不自由な足元でぎこちなくよろめいていたけれど，長い

棍棒は振り回し続けていた。そのうちの一撃が馬乗りの頭にヒットした。次の瞬間，馬乗りはその一撃を肩に受け，素早く身をこなした。だけどこの男にとって，試合は明らかに終わっていた。彼は突然走りだして，腕で２人の警察官をぐいと掴もうとして，舗装された道にとらわれの身になって投げつけられた。両腕で２人の警察官を掴み，男は決して握った手を緩めることなどしなかった。

キャサリン・ヴァン・ヴォーストは，激しい戦いを見て吐きそうになり，貧血で失神した。しかし彼女の不安は，次々に起こる人騒がせでもっとも予期しない出来事によって打ち破られた。彼のそばにいる男は，この世のものとは思われないような無教養なわめき声を出し，立ち上がった。この男は前の座席を越えて幅のある馬車ひきのお尻に飛びつき，そうして馬車を得たのだった。男の猛攻撃はつむじ風のようだった。積荷の上で困惑した警察官は，この身なりは月並みなことだと分かっていたけれど，興奮した目の紳士に気付かないうちに，一撃を受けて，彼はアーチ状に空中を舞いながら舗装された道に落とされた。荷馬車に乗ってきた警察官も顔にキックを受けて，さっきの警察官と同じことになった。さらに３人の警察官が上まで殺到し，登りつめ，ビル・トッツと組み合った。その間に，ビルの頭皮は棍棒によって殴られむき出しにされ，コートやベスト，半分のりの効いたシャツも彼から引きちぎられた。しかし，３人の警察官たちは四方八方へと放り出され，ビル・トッツは石炭の塊を雨のように降らせたのだった。

指揮官は勇敢にも攻撃してきたが，大きな石炭の塊による黒い洗礼を頭の上で受け，転がされた。警察官の望みは，民衆に後方から壊される前に前方で封鎖を崩してしまうことだった。そして，ビル・トッツの望みと言えば，それは民衆が封鎖を打ち破るまでに荷馬車を守っておくことだった。だから，石炭をめぐる戦いは続いた。

群衆は闘士をはっきりとわかっていた。「ビッグ」ビルはいつも通り前方にやってきた。キャサリン・ヴァン・ヴォーストは泣き声を上げながら狼狽して，「ビル，ビル！」と両手を突き上げて声を上げていた。荷馬車の座席に座っていたパット・モリシーは飛び上がり，恍惚感で声を上げ「ビル，やつらをやっちまえ，食い散らして，殺してしまえ」と叫んだ。「見て，ビル！ 前方よ」と女性の声が歩道から聞こえてきた。ビルは警告を受け取り，うまい具合に指示をして，敵の荷馬車の前方の端をすっかりきれいにやっつけた。キャサリン・ヴァン・ヴォーストは頭を傾け，歩道の縁にいる女性を見た。その女性は，血色がよく，黒い目を輝かしていた。その目は，数分前にフレディ・ドラモンドだった男を全身全霊で見ていた。

オフィスビルの窓は大歓声と拍手喝采であふれていた。またオフィスの椅子やファイルの保管庫が雨のように降ってきた。民衆は荷馬車の列の片方を打ち破り，前進してきた。それに，戦闘グループの中央の警察官たちも引き離された。非組合員たちは彼らの座席から引き離され，馬の引き綱を切られ，震える動物たちは逃げて行った。多くの警察官たちが，安全のために石炭用運搬車の下を腹ばいになって這っていた。その一方で，自由の身となった馬たちは，あちらこちらで警察官たちの背中に乗り，警察官たちは頭を抱えながらじたばたしていた。混乱の渦が歩道に波のように打ち寄せ，マーケット通りに押し入ってきた。

キャサリン・ヴァン・ヴォーストは警告を告げる女性の声を聞いた。彼女は歩道の縁に再び戻った。そして，「ビル！ 逃げるのよ！ あなたの番よ！ ここから立ち去って！」

警察官たちは一瞬に，一掃された。ビル・トッツは，舗装された車道に達していて，歩道にいる女性の方に向かって行った。キャサリン・ヴァン・ヴォーストは，この女性がビルに腕を回して，

唇にキスをしているのを見た。キャサリンは彼が歩道の方に降りて来ると，しっかりと見やった。すると，ビルは片腕を彼女に回し，語り合い，笑い声をあげながら歩道を歩いていった。彼は，彼女がこれまで夢にも思わなかったぐらいに口達者で勝手気ままだった。

警察官がまた戻ってきて雑踏を整理し，援兵と新しい馬乗りを待っていた。民衆はなすべきことをこなし追い散らされた。そして，キャサリン・ヴァン・ヴォーストにはフレディ・ドラモンドだと思っていた男性の面影が見えた。彼は混雑の中で，頭が突き出ていた。彼の腕はまだ女性をしっかりと抱いていた。そして，キャサリンは自動車の中で，２人がマーケット通りを横切り，スロットを越えて，三番通りを労働者街の中へと消えるのを見た。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

何年かたって，フレディ・ドラモンドがカリフォルニア大学で行う講義はもうなかった。それに，経済学に関する本もなかったし，労働者に関する問題でフレデリック・A・ドラモンドの名前が出ることもなかった。その一方で，新しい労働者のリーダーが現れていた。その名はウィリアム・トッツだった。彼は第974代国際手袋労働者組合の組合長のメアリー・コンドンと結婚した。それに，ウィリアムはコックとウエイトレスによるストライキを行った人物としてよく知られていた。そしてこういった成功を収める以前に，同時に彼は他の数十もの組合にストライキさせた。そういう組合の間には，鶏肉用選別人と墓掘り人の組合連合みたいなより深い同盟関係はなかった。

"South of the Slot" 1909

『たった一切れのステーキ』

トム・キングは小麦粉ソースを最後のパンのかけらに拭ってそれを綺麗に平らげた。すぐには飲み込まず，ゆっくりとその味を噛み締めて食を終えた。キングは席から離れると急激な空腹に襲われた。たった一人での食事だった。二人の子供はすでにベッドのある部屋に行かされて眠らされていた。そうすることで空腹を忘れさせていたのだ。妻は何も言わず，ただ黙って座って不安そうな目でキングを見ていた。労働者階級の彼女はやせ細り，仕事で疲れ切っているようだった。しかし彼女の若い時からの端麗な顔立ちは未だに消え失せてはいなかった。ソースの小麦粉は彼女が向かいの隣人から借りたものだった。そして二枚しか無かった半ペニー硬貨はパンを買ったため無くなってしまった。

キングは窓のそばの，いまにも自分の体重で壊れそうな軋んだ椅子に座った。そして半ば習慣的にパイプを口にくわえ，コートの片方のポケットに手を入れた。パイプに入れる刻みタバコが切れていることで自分の行動を自覚し，自分のすぐ物を忘れる性格に対して苦い顔をしながらパイプを片付けた。動きは遅く，ほとんど不恰好で，まるで筋肉という重荷を課せられているようだった。体はガッチリしていたが見た目は鈍重に見えた。その風情は人にあまり好感を与えるものではなかった。粗末な服は古臭く，だらしなくたるんでいた。靴の上部は重く，最近の物とは思えない靴底を支えて歩くにはいくらか頼りなく見えた。そして２シリングで買った安いコットンのシャツは襟がほつれていて，もう落とすことはできないであろうペンキのシミがついていた。

しかしキングの顔は間違いなく彼自身を表していた。その顔は典型的なボクサーの顔で，長い間

四角いリングの上に身を投じてきたことが伺えた。いくつもの試合の後が痛々しく，まるで戦う獣のようにあらゆる刻印が一層強調されていた。誰が見ても険しい趣で，むしろそこに目が行きそうなほど綺麗にヒゲは剃られていた。唇は不恰好で，口は荒れており，まるで顔にできた深い割れ目のようだった。顎は尖っていて野蛮で重々しく，厚いまぶたに覆われている目はゆっくりとした動きで，手入れをしていないからかぼっさりと伸びた眉の下では生気すらも感じさせなかった。その目こそ，まさに動物そのものを彷彿とさせるキングのイメージを形成する一番の要因だった。眠そうにも見えるが，ライオンのような目で，まさに戦う獣の目だった。額は短く刈り込まれた髪の方に向かって歪んでいて，傍目からは悪人のような風貌を漂わせるこぶがいくつもあった。何度打撃を食らったかわからない鼻は二回ほど折った経験があり，醜く歪んでいた。耳は常に腫れ上がっており，歪んで倍ほどの大きさになり，カリフラワーのようになっていた。剃ったばかりの顎髭がすでに少し生えてきて，顎にシミをつける一方で，その耳と鼻は彼の顔の装飾としての役割を果たしていた。

さながら，夜の小道や人気のない小道で出くわすと，畏怖の対象となる顔だった。しかし，トム・キングは犯罪者ではなかったし，犯罪的な行為をしたこともなかった。ボクサーという職業にはありがちだが，喧嘩を例外とすれば，誰もその拳で傷つけたことはなく，自分から喧嘩を売ることのない男としてもキングは知られていた。キングはプロだった。そしてキングの獣のようなファイティングスピリットはリングの中でしか見ることができなかった。リング外では温和で穏やかな性格で，若い時，懐具合はよく，気前が良かったので怨みを買うことも無く，彼を敵視している人はほとんどいなかった。戦うことはキングにとってビジネスだった。リングで彼は敵を打った，相手を壊すために，そして破壊するために。しかしそこに敵意はなかった。それはただのビジネスだった。観客は選手が相手をノックアウトする劇的な瞬間を目の当たりにするために会場に足を運び，金を払った。そして勝者は莫大な賞金を獲得する。キングが20年前にウルマルー・ゴウジャーと戦った時，奴の顎はまだニューカッスルとの試合で壊されてから，４ヶ月しか立っていないことを知っていた。だから奴の顎を狙った。そして９ラウンド目でもう一度その顎を壊してやった。それはゴウジャーに悪意があったわけでは無く，それが奴を負かし，多額の賞金を手にする最も賢いやり方だったからだ。奴もキングになんの悪意もなかった。それはただの試合なのだ。お互いにそのことを知って，ただ試合を行なっているに過ぎなかった。

キングは無口だった。キングは静かに，不機嫌そうに窓のそばに座って両手を見つめた。手の裏の動脈は大きく膨れ上がっていた。拳はぐしゃぐしゃに使い古され，不格好だった。その両拳は長い間戦ってきたということを物語っていた。キングは動脈が尽きれば人生も終わる，そんなことは知らなかった。しかし，自分にはその大きく膨れあがったこぶしの意味がわかっていた。極限のプレッシャーの中で，心臓は大量の血液を身体中に送った。もはや正常に動いているとは言えなかった血管が伸びきって弾力性がなくなり，それと共に持久力がなくなっていた。体は疲れを感じやすくなっていた。もはやキングに20ラウンド戦う力は残っていなかった。ゴングの音が鳴り，もう一度それが鳴るまで凄まじいパンチの応酬が続く。一時はロープ際に追いつめられ，ピンチになったと思うと，体を巧みに入れ替え，今度はキングが逆にロープ際に敵を追い詰める。最後のラウンド――20ラウンド目にこのゲームで一番激しくそれでいて素早いラリーを仕掛ける。その瞬間，観衆は叫び，キングはラッシュを打ち続け，相手の懐に潜り込み，パンチの雨を浴びせる。すると相手

も負けじと反撃し，今度はキングがそれをもらうのだ。試合中，キングの心臓はうねるように血を動脈に送り続ける。動脈は膨らみそしてしぼんでいく。血管は少しずつだが，だんだん大きく膨らんでいく。キングはその動脈を見つめ，そして長い戦いでボロボロになった拳に目をやった。その瞬間，ベニー・ジョーンズもしくはウェル・テラーとして知られる選手との戦いで砕かれる前のまだ綺麗だった若い時の拳を思い出した。

極度の空腹感に襲われる感覚が再びキングを襲った。

「ちくしょう，一切れのステーキがなんで我慢できないんだ」大きな拳を固く握り締め，口汚い悪口をどもりながらも吐き出しつつ，大きな声で呟いた。

「バークさんのとことソーレイさんのとこにかけ合ったんだけど…」キングの妻は半ば謝るように言った。

「どっちの店でも買えなかったのか」キングは尋ねた。

「ええ，半ペニーだってダメって。バークさんは……」彼女はたじろいだ。

「言ってみろ！ 奴は何て言ったんだ！」

「今晩どうせサンデルに負けるだろう。あんたのツケがどれくらいたまってることか，って言うの」

キングは頷いただけで返事はしなかった。若い時に飼っていたブルテリアのことを次々と思い出していた。キングはブルテリアに膨大な量のステーキを餌としてあげていたのだった。その頃，バークはツケで大量のステーキを売ってくれたものだ。しかし，時代は変わった。キングは歳をとった。二流のジムで戦っているこの男に，もはやどんな掛け売りも期待することはできなかった。

キングは一切れのステーキ恋しさの気持ちに苛まれながら朝を迎えた。そしてその感情が収まることはなかった。キングはこの試合の前に十分なトレーニングを行うことはできなかった。その年のオーストラリアは干ばつに悩まされ，厳しい季節だった。臨時のアルバイトとしてすら，雇ってもらうのは困難だった。キングにはスパーリングの相手もおらず，食べるものもベストなどころかいつも十分にはなかった。キングはできる時は人夫として雇ってもらい，そこで数日間，働いた。そして，足を本来の状態に戻すため，朝早くから公園の周りを走っていた。しかし，やはり協力者のいない中でのトレーニングは困難を極めた。その上，キングには妻と二人の子供もおり，養っていかなければならなかった。商売人へのツケは，サンデルとの試合が決まった時わずかに増やしてもらった。ゲイティージムの胴元はキングに負けた時の取り分３ポンド前払いしてくれたが，それ以上は断わった。今までずっとキングは古くからの友人から幾らか借りていた。干ばつに見舞われていなければもっと貸してくれただろう。しかし友人にとっても厳しい時だったのだ。いや，もはや十分なトレーニングができていないことを偽るのは無駄だった。もっと良い食事をとり，一方で安定した精神を保つべきだったのだ。そして，ボクサーが40を迎えた時，自分の調子を整えるのは20才の時よりも難しいことだったのだ。

「リズィー，今何時？」キングは尋ねた。そして妻は廊下を横切って隣人に時間を聞きに行き戻ってきた。

「７時45分よ」

「あと数分で最初の試合が始まる」キングは言った。

「ただのトライアウトだが，そのあとディーラー・ウェルズとグリードリーの４ラウンドのスパー

がはじまる。そのあとスターライトとどこかの船乗り野郎で10ラウンドだ。俺の出番は１時間以上来ない」

10分間の沈黙の後，キングは立ち上がって言った。

「実際，リズィー，俺は今回十分なトレーニングができなかったよ」

キングは自分の帽子を取って，ドアの方へ向かった。リズィーにキスをしようとはしなかった。キングは出発する前にキスをしたことはなかった。しかし，この晩はリズィーの方からキングにキスをした。腕をキングの背中に回し，屈んで顔を彼女の方に近づけるよう，求めた。大柄な男の前ではリズィーは相当小さく見えた。

「頑張って。トム」彼女は言った。

「あいつに勝って」

「ああ。やっつけなきゃな」キングはそう繰り返した。

「俺がやることはそれだけさ。勝つだけだ」

リズィーが体をさらに寄せてきたので，キングは無理に笑顔を作って見せた。ガランとした部屋を妻の肩越しに見て，この世で今の自分にはとうの昔に支払い期限を過ぎている請求書，そして妻と子供たちしか残されていないという事を再確認し，その事実が重い粘土のようにズシンと心に伸し掛かった。それでも妻と子供達にこれ以上不憫な思いをさせてはいけない，そんな思いが今の彼を動かしているのだ。ほどなくして，キングは覚悟を決めて夜のとばりに包まれた街へと出発した。妻と子供達を食わせていかねばならない。ただの機械の前で延々と立ち尽くしている労働者にその役目を果たすことは不可能だった。古臭くても，野蛮な動物のように戦うことで責務を果たすのだ。ボクサーとしての高潔なキングのプライドは今，静かに，それでいて熱く燃えていた。

「やるしかない」キングは強く言い放った。後戻りはできない，そんな思いが言葉には込められていた。

「勝つことができれば30ポンド手に入る。今の借金を返すにはお釣りが出るぐらい十分な金だ。だが，もし負ければ，一文無しさ。帰りの電車代だって残りはしないだろう。胴元は敗者の取り分だけしかくれなかったからな。じゃあ，行って来る。勝ったら，まっすぐ家に帰って来るさ」

「起きて待っとくわ」リズィーは玄関ホールにいるキングにそう告げた。

２マイルもあるガイエティまでの道のりをキングはひたすら歩いて向かった。その道のりの中でいつのまにか無くしてしまった輝かしい日々を思い出していた。キングはかつてニューサウスウェールズ州のヘビー級チャンピオンにまで上り詰めたことがあった。チャンピオン時代は今とは対照的に，歩いて会場に向かったことなど一度もなかった。タクシーで会場に向かい，キングを支持していた種々雑多な奴がその金を払って一緒に乗って行った。トミー・バーンとヤンキー，ジャックジョンソンと言ったボクサーは車で動き回っているのだ。ところがキングは歩いて向かっている。試合前の準備運動にしてはその道のりを徒歩で進むのは長すぎる，それは誰の目から見ても明らかだった。さらにキングはもう若くはなかった。年老いた奴に世間は甘くはない。ボクサーとしての道以外で生きていくには，土方として生きていく他無く，その道でさえ，試合で壊れた鼻と腫れた耳が彼の仕事に支障をきたした。キングは商業について学びたいと思っていた。長い目で見るとその方が安定した生活をできるのは明らかだった。しかし，誰もそのやり方を教えてはくれなかった。いや，教えてくれたとしてもキングは聞かなかっただろうと心の底では分かっていた。

当時のキングにとってこの世は簡単なものだった。大金は手に入るし，試合中の彼の姿は輝かしく，合間には休憩と開放があり，キングのことを褒めちぎる熱心な取り巻きがついて来て賞賛し，握手を求め，紳士はキングと話せるならと酒を奢ってくれた。そうした事は栄光だった。観客は叫び，疾風とも形容されていた素早いフィニッシュブローを代名詞に引っ提げ，敵を圧倒した。レフリーは「勝者，トム・キング！」と宣言し次の日には新聞にはキングの名が報じられたのだ。

あの頃は良かった！ しかし，キングはゆっくり，その記憶をひととおり頭にめぐらせた後，気づいた，自分が退けて来たのはただの年老いたボクサーだったということを。キングは若くて上り調子だった頃，あいつらは年寄りで下り坂だった。どうりでうまく行ったはずだ。血管を腫らし，拳は潰して戦って来たあいつらの体はすでに弱っていたのだ。キングは今の自分と同じように年老いていたボクサー，ストゥシャー・ビルとラッシュカター湾の会場で戦ったことを思い出した。その試合は18ラウンド目でとうとうキングのパンチがビルを失神させ，TKO 勝ちした試合だった。その試合の後，控え室でビルは生まれたばかりの赤ん坊のように泣いたのだ！ おそらくビルはキングと同じように借金を抱えていたのだろう。おそらくビルはキングと同じように養わないといけない妻と子がいたのだろう。そして，おそらくビルはキングと同じように無性に一切れでもステーキを食べたかったのだろう。ビルは試合に負けてしまった。しかも，その代償に深い傷を負ったのだ。キングは苦労を重ねた今，ようやく理解した。ビルは20年前のあの夜，多い方の掛け金のために戦っていたのだ。その想いは金や名誉のために戦っていた当時のキングより強かっただろう。控え室でビルが流した涙は，悲しみによるものだけではなかったのだ。

人間という生き物は，人生でたくさんの試合をこなさないといけない。それが人生の鉄の定めである。ある者にとっては100回の困難な戦いが待ち受けているかもしれないが，ある者はたった20回かもしれない。それぞれが置かれた環境，素質，そして家族によってその数字は変わる。そしてキングは自分に与えられた戦いより遥かに多くの試合をして来たのだ。彼はその戦いに命を費やし，赴くままに動脈を働かせた挙句その弾力をなくし，しなやかさは筋肉の硬いこぶとなり神経をすり減らし，いきすぎた努力と持久力によって脳と骨を軋ませ，疲労困憊に陥り，相当な疲労に耐えながら戦ってきたのだ。キングは誰よりよくやってきた。もはや彼と戦ってきたボクサーは残ってはいなかった。キングが古参の最後の一人だった。キングは彼らがこの世界から退くのを数え切れないほど見てきた。そしてその中にはキング自身が引導を渡したものもいた。

興業主の奴らは年老いた連中をキングと戦わせた。しかし，そんな彼らをキングは笑って払いのけてきた。控え室で泣いたビルもその内の一人だった。そして，今キングがその立場にいる。今度は自分が歳を重ね，若いボクサーと戦わされるのだ。ブローク・サンデル，ニュージーランドから数々のレコードを引っさげて来た彼がその若いボクサーを務めることになるだろう。ニュージーランドでは名を馳せている彼だが，オーストラリアでサンデルを知るものは誰もいない。それゆえ，キングが今回の対戦候補に選ばれた。もしサンデルが上手くやってのければ，さらに他の有望株があてがわれる可能性もある。ファイトマネーだってそちらの方が良いだろう。つまりサンデルが今後台頭していけるかどうかはキングとの試合にかかっているのだ。今のキングとは対照的にサンデルは金も名誉も手に入る環境にいる。実績だってそうだ。その一方で，キングは相手の富と名声を守るためのまな板にすぎなかった。キングには試合をして，勝って30ポンドを手にして家主と商人に借金を返す以外に道は無かった。本当に勝てるのか，キングは思いを巡らせ，若かりし時の自分

の姿を思い浮かべた。当時キングは上り坂で誰にも負ける気はしなかった。そして実際に誰にも負けなかった。がっしりとした筋肉は柔軟性にも優れ滑らかな肌がそれを覆っていた。心臓と肺は疲れることを知らず無限とも称されるスタミナを持っており，自分の努力に限界はないと豪語すらしていた。そう，ボクサーにとって若さとは脅威でもあった。若さは容赦なく年老いたボクサーを淘汰していった。そして気づかぬうちに，若さは自分の身も滅ぼしていった。戦いの中で動脈は広がり，拳は傷ついていく。若さは永遠なのだ。歳を取るのは年齢だけなのである。

カッスルレーストリートでキングは左に曲がった。3ブロック先にゲイティークラブがあった。外には20代，中には10代ともとれる若者がいてうやうやしく道を譲った。その中の一人が「おい，トムだ！ トム・キングだ！」と叫んだ。

キングは会場の中に入り，控え室に向かった。その途中で今回の試合の胴元に出くわした。彼は鋭い目をしており，その若い年齢にはそぐわない抜け目のない顔つきをしていた。彼はキングに握手をして言った。

「トム，どうよ調子は」

「すこぶる良いね」キングはそう答えた。しかし，明らかに調子が良さそうには思えなかった。実際，今手元に1ポンドでもあれば今すぐにでもステーキを食べにいくだろう。それほど今のキングは疲弊しきっていた。

キングが控え室から出てきた時，セコンドが後ろに控えていた。そして通路からホールの真ん中にある四角いリングまで歩いた。会場では，キングが現れた途端大きな拍手と歓声が，長い間待っていたであろう観衆から鳴り響いた。キングは右，そして左に頭を下げた。しかし，観客の中にキングが知っている顔はほとんどなかった。それもそのはずで，キングが四角いリングの中で栄光を手にしていた時，今日の観客の大多数を占める若者達はまだ生まれてもいなかったのだった。リングに連なっている段へと軽く飛び越え，ロープをくぐり自分のコーナーへと向かった。折りたたみ椅子に腰をかけると，レフェリーのジャック・ボールがやって来て，キングに握手を求めた。ボールはボクサーくずれのレフェリーだった。しかし，故障持ちでもう10年以上，主戦選手としてはリングに立ってはいなかった。キングは彼がレフェリーで安堵した。いわば二人とも古参なのだ。サンデルとの試合で少々ラフプレイに走ったとしても，ボールなら見逃してくれそうだった。

今にも飛びかかって来そうなほど荒立っているヘビー級のボクサー達が次々とリングに登った。レフェリーはボクサー達を紹介し，彼らの挑戦の意向を観客に伝えた。

「北シドニー出身，ヤング・プロント！ ヤング・プロントは賞金50ポンドをかけて今夜の勝者に挑みます」ボールは高らかに宣言した。

観客からは次々と拍手が鳴り響いた。その瞬間にサンデルが現れ，より一層強い喝采が会場を包んだ。ロープを軽く飛び越えると，自分のコーナーへと向かい，座った。キングはリング越しにサンデルを注意深く見た。ほんの数分後にはお互いが情け容赦の無い戦いの中にとらわれ，さらに，両者は相手の意識を飛ばすことに全力を注ぐのだ。サンデルはキング同様，リングコスチュームの上にさらにズボンとセーターを着ていたため，キングは彼の風貌をよく観察することはできなかった。サンデルの顔は鋭く整っていて，少しカール状に巻かれている黄色い髪が，こんもりと山を作っていた。首には厚い筋肉を従わせ，それが堂々たる体にかけて続いていることをうかがわせた。

ヤング・プロントが二人のコーナーに行き，両者に握手をして，リングを降りた。次々と挑戦者

が続いた。キングにとって対戦相手はいつも若かった。まるで自分だけが歳をとっていく感覚だった。相手が今ロープを登ってくる。若いボクサーには無名だが計り知れない輝きがあった。そして彼らは強さと技術を併せ持った勝者にふさわしい姿を望んだ。数年前，キングがまだ敵知らずだった時，この前座のイベントを面白がって見ていた。時にはつまらなく感じることもあった。しかし，キングは今，若い彼らから目をそらさずにじっと座って，イベントを見ていた。いつも若い有望株達はロープを飛び越え，まるで相手が誰であろうと勝てるかのように試合に臨む。そして，我らベテランと呼ばれるもの達は彼らの前でリングから降りる。若手は我らを乗り越えて進む。抗い難い若手が台頭してくれば来るほどその勢いは増し，我らは窮地に追いやられてしまう。しかし，いつか彼ら自身も年をとり同じ道をたどるのだ。それでもまた新しい精力に満ちた若手が生まれ，彼らを圧倒し，リングから引きずり落としてしまう。我らにとって，若さとはいわば永遠なのだ。いや，彼ら若手にとっても若さは永遠かもしれない。彼らが年を取り，また新しい若手が今度は彼らを下す。若さは永遠に死なない。

キングは記者席の方を一瞥して，そこに座っていたモーガンとコルベットに向かって頷いた。モーガンは「スポーツマン」の記者であり，コベットは「レフェリー」の記者だ。キングが両手を差し出すと，セコンドのシド・スリバンとチャーリー・ベイトがグローブをはめてそれをきつく縛った。サンデルのセコンドの一人はそれをじっと見た後，今度はキングのこぶしに巻かれているテープを注意深く確認した。そして，もう一人のセコンドはサンデルのコーナーに行き，最終確認を済ませた。サンデルはズボンを脱ぎ，立ち上がり，今度はセーターを頭から脱いだ。キングはサンデルの壮大で鍛えられあげた若さが宿った筋肉に目をやった。その筋肉はまるでその滑らかな皮膚の下に何かが生きているかのようだった。全身に命がうごめいていて長い戦いの中でもその輝きは皮膚に連なっている導管からは流れ出て失われることは決してないだろう。そうキングは感じていた。

二人の男はリング中央でじりじりと，歩み寄った。ゴングが鳴り，それぞれのセコンドが折りたたみ椅子を持ってリングから出るのと同時に，両者は握手を交わし，それぞれが得意としているファイティングスタイルをとった。そしてすぐに，サンデルは引き金の上でバランスを取る機械のように，俊敏に左右そして上下にステップをとりつつ右に左に目や胸にパンチを当てた。体制を低くし，いつでもカウンターを取れる体勢をとった。彼の体は軽やかでまるでダンスをするかのようにキングとの距離を測った。サンデルは俊敏で賢さも持ち合わせていた。それはキングにとって相当脅威なことであった。会場は熱気に包まれ，観客は戦いを求めて叫んだ。しかし，キングはそれには踊らされなかった。今までたくさんの試合をこなし，若手との経験も豊富なキングだった。サンデルの攻撃が俊敏で巧みで危険だとすぐに察知した。それを証明するかのようにサンデルはまだ序盤にもかかわらずラッシュを仕掛けて来た。しかしキングはそれを予期していた。若いボクサーはよくそうする。サンデルの動きは華麗で，狂ったような猛攻撃を仕掛け，キングを圧倒した。まるでその姿は飽くなき栄光を強く求めているようだった。

サンデルはその軽い足で，それでいて熱心に，あちこちへとステップした。白く生き生きとしているサンデルの白い筋肉はそれ自体が攻撃という織物をおるようだ。まるでシャトルのように滑らかに動き，跳躍し，無数のアクションを繰り出した。それも全て，自分の栄光への道に立ち塞がるキングを排除するためだった。それでもキングは根気強くチャンスを求め，耐え続けた。キングは

自分が何をすべきかをわかっていた。キングはもうサンデルのように若くない。それゆえ，相手のスタミナが切れるまでただ耐え続けるしかないと考えた。自分自身に向かって笑顔さえ見せ，相手の懐にあえて飛び込んだ。相手の重いパンチを額で受けようというのである。それは正当な戦い方とは言えなかったが，ボクシングのルール上は何の問題もなかった。男なら自分の拳に自信を持っているはずだ。そして相手の額にパンチを放つことが強要される場面に出くわしたら，リスクを負ってでもパンチを放つだろう。そして，サンデルは危険ながらもその重いパンチを繰り出した。この時キングは，相手のパンチのダメージを受け流すため，もっと低く潜り込むべきだった。しかし，自分がウェルシュ・テラーとの戦いで己の拳を彼の額に繰り出し，拳を痛めたことを思い出した。キングはただ試合をしているにすぎなかった。キングのダッキングはサンデルの拳を捉えた。サンデルは相手の思惑には気にもとめず，試合中はずっとパンチを容赦無く，自分が出せる最大の力で出すつもりだった。しかし，長い戦いが影響を及ぼしだすと，サンデルはのちに自分を振り返り，自分の拳が，キングの額によって壊されてしまったことを後悔するのであった。

第１ラウンドはサンデルに軍配が上がった。観客はサンデルの風を感じさせる素早い攻撃に熱狂を隠せなかった。サンデルはパンチの嵐でキングを圧倒した。もはやキングになすすべはなかった。キングは一度たりともパンチを与えることができなかった。体を丸め，ブロック，ダッキング，そしてクリンチをして，ダメージを軽減するので精一杯だった。キングは重いパンチが当たると，時折，頭を振りフェイントをかけた。ゆっくり動き，そして飛び跳ね，力を無駄使いしようとはしなかった。慎重に相手の出方を伺っているこの老いぼれが反撃してくるまでに，サンデルは若者らしい泡を吹くに違いない。キングの動きの全ては鈍く規則的で，重そうな瞼であり，ゆっくりと動くキングの目からか，サンデルにはキングがまるで半分眠っているか，呆然としているように見えた。しかし，その目は全てを見通していた。その目こそ20年間リングの力で，その力が培われて来た目だった。たとえパンチが迫って来ても目を閉じたり，たじろいだりすることは一切なく，冷静にそれを観察し，距離を測ることができる目だった。

第１ラウンドが終わり，数分間の休憩時間がキングに与えられた。コーナーでキングは後ろにもたれかかり，深呼吸をした。腕をロープに直角にかけ，休ませた。セコンドがタオルでキングを仰いでいる間，キングの胸部と腹部は，息を飲み込むたびに大きく揺れ動いた。キングは目を閉じて観客のざわめきを聴いた。

「もっと自分から戦いに行け！」たくさんの観客が叫んでいた。「怖いんじゃないだろうな！」

「筋肉が硬くなっているな」前に座っている男のコメントが聞こえてきた。「あの筋肉じゃサンデルより早く動けないに決まっているこりゃ２対１でサンデルに賭けたほうがいいな」

ゴングが鳴り再び二人の男がコーナーから出て，お互いに歩み寄った。サンデルはリングの3/4ほど前に出てくると，そこで果敢に戦い始めようとした。しかしキングは少し前に出ると，そこで距離を保った。それはキングの作戦の一つだった。キングはこれまで十分なトレーニングができず，まともに食べるものもなく，一歩一歩の労力にさえ拘った。それもそのはずで，キングはすでにその足で試合会場まで２マイルもの距離も歩いて来たからだ。まるで１ラウンド目を巻き戻したように，第２ラウンドもサンデルは疾風の如く，猛攻撃を仕掛け，そして観客はキングが戦おうとしないと腹を立てた。一方のキングは，またもフェイントを織り交ぜながら，遅く，サンデルにとってはまるで意味のないかと思われるような遅いパンチを繰り出し，必死にサンデルの攻撃をガード

し，時に休んだり，クリンチで逃れたりする他無かった。サンデルは早く試合を終わらそうとペースを上げようとした。しかし，キングの自らの経験からくる知恵はサンデルのペースに乗せられるのを拒んだ。キングは殴られ続け，顔の形が変わりながらも，うちから湧き出てくるまだ戦い足りないというパトスに微笑みさえもした。そしてサンデルの若さに対し，この歳をもって初めて抱えることができる妬みを感じた。サンデルはまだ若かった。そのため，その若さゆえの自由奔放な戦い方は，彼の体力を消費し続けた。長く，苦痛だった試合で培われた知恵で，キングはリングでの主導権を握った。冷静な頭と目で，ゆっくり動きながらサンデルが泡を吹くのを待った。大多数の観客にとっては，キングがもうなすすべもなく今にも試合に敗れそうに見えた。しかし，観客の中には数人ではあるもののキングを古くから知っている者もおり，彼らはこの賭けに勝ったと思っていた。

第３ラウンドが先ほどと同じようにワンサイドで始まり，またもサンデルが試合をリードし，幾多の攻撃をキングに浴びせた。サンデルが少し自信を滲ませながら攻め続け，30秒ほどたって隙を見せた時，突如，キングの目と右腕が光ったように見えた。それはこの試合初めてとなるキングの一撃だった。それは少し腕をひねり，弧を描きながら繰り出されたフックで，それは普通の打撃よりも重い一撃となった。さらにキングは体の重心の半分にその体重を乗せ腕を振り切った。それはまるで，寝ているフリをしているライオンが，突然，稲妻のような速さで前足を突き出したようだった。顎にその一撃をもらってしまったサンデルは，まるで牛のようにその場に倒れた。その瞬間，観客は，静まり返り，それから少しずつざわめき出し，畏怖の念を抱きながらも次々と称賛の声を口にし出した。結局のところ，サンデルの前に立っているその男は決して，硬い筋肉を背負ってはいなかったのだ。事実，キングはまるでバネで勢いがついたハンマーのようにその拳を振り抜くことができたのだ。

サンデルはパンチが効いていた。そしてぐるっと転がり，起き上がろうとした。しかし，サンデルのセコンドがはっきりと大きな声で，カウントギリギリまで休むように指示したため，サンデルはそれに従った。レフェリーはサンデルの体に覆いかぶさるようにカウントし，その間サンデルは膝をつき，いつでも立てるように待った。そして，９カウント目でサンデルは起き上がり，ファイティングポーズをとった。キングは再びサンデルと向かい合った。そして，先ほどの一撃がわずかにサンデルの顎の急所を外れたことを後悔した。もしクリーンヒットしていたら，相手はノックアウトしていたに違いない。そして30ポンドを手にし，妻と子供達が待っている家へと帰ることができただろう。

その後，そのラウンドはまるまる３分続き，サンデルはこの試合で初めて試合相手に敬意を払い，キングは先ほどと変わらずゆったりとした動きで眠そうな目で相手を見つめていた。ラウンドが終わりに近づくと，キングは視界の片隅に，自分のセコンドがリングの外でしゃがみこみ，ロープを飛び越えてキングの元へ来ようとしているのに気づいた。そして，すかさず自分のコーナーの近くで，戦いを仕掛けた。第３ラウンド終了のゴングが鳴ると，サンデルが自分のコーナーまで対角線に歩いて戻らなければならない一方で，キングは歩くことなくすぐに用意してあった椅子に座った。それは小さなことではあったが，積もり積もれば，無視できないほど大きなものになるのであった。サンデルはキングよりかなり多くの歩数を歩かなければならなかったので，労力を費やし，結果，休む時間も短くなった。どのラウンドの初めもキングは自分のコーナーの前でゆっくりと動

き，サンデルが自分の方へとくるように仕向けた。さらに，どのラウンドの終わりも，キングは自分のコーナーの近くで試合を進め，すぐに椅子に座れるように策略した。

それから２ラウンドが流れ，依然，キングは倹約的に試合を運び，対照的にサンデルはエネルギーを消費し続けたのであった。しかし，サンデルはそれでも試合のペースを早めようとし，数多くのブローをキングに浴びせ，それが年寄りの身体にはこたえた。しかし，まだ若いせっかちなこの相手がキングに戦いを強いようとしても，キングはそのゆっくりとしたペースを保ち続けた。第６ラウンドで，またもサンデルは気を緩め，またもキングの鋭い右がサンデルの顎を射抜いた。そしてまたもサンデルは９カウントを待って起き上がった。

第７ラウンド目までにサンデルのコンディションのピークは過ぎた。そしてサンデルは今まで戦って来た中でもかなり手強い相手だとキングを認識した。トム・キングは年老いている。しかしサンデルが今まで出会って来たどの年寄りよりも優れた相手だった。決して考えることをやめず，ディフェンス技術も卓越しており，彼の一撃は重く，どちらの腕でも，ノックアウトさせるには困らないパンチを繰り出すことができた。それにもかかわらず，キングは自分からは積極的に打ちに来なかった。痛めた拳のことを忘れてはいなかったのだ。その拳がこの試合に持ちこたえるにはあと数発しか猶予がないことがわかっていた。キングがサンデルを見ながらコーナーの椅子に座った時，ある考えが浮かび上がって来た。それはサンデル自身が持つ若さとキングの知恵を持ってすれば，彼がヘビー級の世界チャンピオンになるのも夢ではないということだ。しかし，現実は甘くない。サンデルはなれないだろう。サンデルにはその知恵が備わっていなかった。もしなれるとするならば，経験を積み，知恵を手にすることだ。しかし，その時にはもう彼は若くはないだろう。

キングは彼が知っているすべての策を投じた。クリンチの機会は逃さなかったし，持てる力をすべて肩に込め，サンデルの脇腹にきつく，押し付けた。ボクシングの研究では，ダメージ量と，使う労力は，肩とパンチで同じぐらいだと言われている。キングはクリンチの間自分の全体重をサンデルに乗せ，逃さないようにし，体を休めた。その度にレフェリーは間に入り，二人を引き離した。それは常にサンデルの助けを要したが，そのサンデルは，キングのような休み方をまだ知らなかった。サンデルは己の見事な腕を使い，筋肉をよじるしか策がなかった。キングがクリンチをすると，サンデルのあばらにはキングの肩が食い込んだ。そして，キングは頭をサンデルの左腕の下に押し付けて，また休んだ。その間，サンデルはほぼ毎回自分の背中とその突き出ているキングの頭に向かって自分の右を振った。それはサンデルの技術力を感じさせる攻撃で，観客は思わず感心したが，それほどキングにとって危険なものではなく，ただ体力を消費させるだけに思われた。しかし，サンデルのスタミナは切れることがなく，自分自身の限界に気づくことさえなかった。それでもキングはニヤリと笑い，粘り強く耐え続けた。

サンデルの強靭な右はますます威力を増し，キングのボディに突き刺さった。そしてその光景はまるで，キングが深く重い罰を受けているように見えた。しかし，キングは巧みな軽打をサンデルがパンチを打つ瞬間，サンデルの上腕二頭筋に何度も放っていた。そしてその軽打はみごとにサンデルにヒットし続け，パンチの威力を奪っていった。９ラウンドに入り，１分間の間に３回ほど，キングはサンデルの顎をめがけて腕をひねりながら右でフックをした。そしてサンデルの重いボディは３回，マットに沈み，毎回９カウントまで待ち，震えながらも起き上がった。サンデルの攻撃の手が緩むことはなかった。サンデルは次第にスピードを失っていったが，それほど労力は消費

してはいなかった。戦いの最中，サンデルは不屈に戦い，己の魂にすがり続けた。そしてその魂こそが若さであった。一方のキングは，経験がそれに値した。キングの活力と精力に陰りが見えてきても，長年の経験が生み出した己のしたたかさと知恵で，それを乗り切った。キングはいかに無駄なく動けるかだけでなく，いかに相手の力を受け流すかということを往年の闘いから学んでいた。何度も何度も，キングは腕，足，そして体，使えるパーツ全てを使いフェイントを仕掛け，サンデルを誘い，ダッキングやカウンターに持ち込んで戦った。時にキングは体を休ませ，そしてサンデルには同じことを許さなかった。それは，まさにベテランがなせる技だった。

10ラウンド目の初めに，キングは顔を目掛けての左ストレートでサンデルのラッシュを止めようとした。サンデルは用心し，自分も左を合わせ，ダッキングをし，右腕を振りかぶりキングの側頭部を狙ってフックをした。そのフックは試合を決める一撃となるには少し狙う位置が高すぎた。しかし，そのフックが当たった瞬間，キングの頭に，覚えのある，どこか懐かしいとも言える黒いベールの急襲に見舞われた。その時，いや認識するには短すぎる瞬間，キングの動きは止まった。そしてキングの目には白い背景を背後にサンデルが視界の外へと屈むのが見えた。もう一度サンデルを見たとき，背後には観客が見えた。その瞬間はまるでキングは少しの間眠りに入り，目を覚ましたかのようだった。しかし，キングの意識が飛んだ時間は非常に短く，キングは倒れなかったが，観客はキングがよろめき，膝が地面に着いたのを目の当たりにした。それでもキングはすぐ建て直し，顎を左肩の奥に深く押し付けた。

何度もサンデルはパンチを繰り出し，キングの意識を飛ばしかけた。その度にキングは防御に転じた。しかし，ただ守っていただけではない。カウンターを狙っていたのだ。左をフェイントに使い，半歩下がって全身全霊の力で右のアッパーカットを繰り出した。そのパンチがとても正確でタイミングも良かったので，低い体制をとっていたにもかかわらず，サンデルの顔はそれをまともにくらった。サンデルの体は宙に浮き，後ろに回転して，肩と頭からダウンした。キングは二回もサンデルに対しこの快挙をやってのけた。さらにキングは手を休める事なく連打を繰り出し，またもサンデルをロープ側に追いやった。もはやサンデルに己を休ませ，体制を整える暇はなかった。キングはパンチの雨を降らせ，とうとう観客は立ち上がり，鳴り止まない拍手と喝采の雨が会場を支配した。だが，サンデルの強靭な粘り強さは想像以上だった。サンデルはリング上に立ち続けた。ノックアウトが確実なように見えてきだし，そのあまりに激しい打ち合いを見て，警部は試合を止める準備をするため，立ち上がった。とうとうゴングが鳴りラウンドが終わった。サンデルはコーナーへよろめきながら向かい，警部に，まだ力は残っている，まだ戦えると告げ，試合を続けさせろと要求した。それを証明するかの様に二回とんぼ返りをして見せた。そしてとうとう警部はサンデルの言うことに従った。

キングはコーナーにもたれかかり息を荒らげながら，悔しがった。もし試合が止められていたら，否応なしにレフェリーはキングの勝ちと判断し，賞金はキングの手にあっただろう。栄光やこれからのキャリアのために戦っているサンデルとは違い，キングはただ目の前の30ポンドのために戦っていた。そしてサンデルは１分間のインターバルで力を取り戻すだろう。

「若いうちが華なんだ」なぜだろうか，キングの頭にその言葉がよぎった。いつだろうか，この言葉を初めて聞いたのは。そうストゥシャー・ビルを倒したあの夜だった。試合の後キングに一杯奢った紳士が肩を軽く叩いて，キングにその言葉を掛けたのだ。若いうちが華！ あの紳士は正し

かった。そしてずいぶん昔のあの夜，キングは確かに若かった。今はキングの目の前に，若いボクサーは座っている。一方のキングはもう30分以上も戦っている，すでにベテランのボクサーだった。もしキングがサンデルの様に戦っていたら15分だって持たなかっただろう。さらに問題な事は，キングがサンデルの様にインターバルで回復しきれないと言うことだった。浮き出ている動脈と戦い抜いてきた心臓がラウンド間にキングが力を蓄えることを許さないのだ。さらにキングは立ち上がる力も十分に持っていなかった。足はずっしりと重くキングにのしかかり，痙攣さえも起こしつつあった。会場への道のりを歩いてさえいなければ……。そして，キングはあのステーキのことを思い出した。あの朝食べたかったステーキだ。もし一切れでも食べていたら……。とてつもない恨みとも言える感情が湧き上がってきた。あの肉屋がツケでステーキを買わせてくれれば……。ベテランが十分に食事をとらないで試合をするにはあまりにも過酷すぎる。そしてたった一切れのステーキと言うのは些細なものだった。せいぜい数ポンドで買えるだろう。だがその些細なものが目の前の30ポンドを左右していた。

ゴングが鳴り，11ラウンド目が始まると共にサンデルはラッシュを仕掛けてきた。サンデルは前のラウンドが嘘の様に生き生きとしている様に見えたが，実際はそうではなかった。キングはそれがハッタリであると見抜いていた。古いやり方だった，ボクシングの歴史さながら。キングは少しでも力を節約するためクリンチをし，サンデルを逃して体制を整えさせた。キングが狙っていたのはまさにそれだった。左でフェイントをかけサンデルのダッキングを誘発し，上部に向けてフックを繰り出させた。そして半歩後ろに下がり，ありったけの力を込めてサンデルの顔にアッパーカットを放った。サンデルは地面に崩れ落ちた。その後もキングはサンデルに休む暇を与えなかった。キング自身も強打をいくらか受けた。それでもキングはそれ以上の打撃を与え，ロープ側に追い込んだ。そしてフックに加え，キングが持っている全ての技術を使い激しい強打を繰り出した。サンデルが倒れそうになった時でさえ，片方の腕で支え素早く攻撃を仕掛け，ロープ際に追い込み，倒れることさえ許さなかった。

観客のボルテージは上がり，熱狂に包まれ，皆が叫んだ。もはや観客はキングの方についていた。「やれ！　トム！」「倒せ！　倒せ！」派手な最後になるはずだった。そしてそれこそが観客たちが金を払ってまで望んだものだった。

30分間力を貯め続けてきたキングはとうとう惜しみなくそれを解き放った。キングは自分を信じ，最後の賭けに出た。これが最後のチャンスだった。それを逃せば次はないだろう。自分の力が急激に抜けていくのをキングは感じた。そして，キングはただその力がなくなるまでに敵を倒し，カウントを数えさせることを祈った。サンデルに自分の力を放ちながら，あくまで冷静にキング自身が繰り出せるパンチのダメージとそれをどれくらい与えられるかを考えると，あらためてサンデルがとてつもない強敵に感じ，倒す労力を考えると気が遠くなった。サンデルのスタミナと忍耐力は計り知れず，そしてそのスタミナと忍耐力は若さ故にみずみずしかった。サンデルはこれから伸びる。サンデルには素質があった。まだ荒さはあるが，その素質が成功するボクサーの特徴を形取っていた。

サンデルはヨロヨロとふらついていたが，キングの足もまた痙攣を起こしていて拳を放つことができなかった。それでもキングは己を奮い立たせ，強烈なパンチを繰り出す構えをとった。しかしその一発一発は，長年の戦いでボロボロになった拳をさらに痛めることを意味するのであった。実

際に致命的な一撃をもらったわけでは無かったが，キングもサンデルと同じくらい疲弊してきていた。キングのパンチは相手の急所にヒットすることもあったが，もはやそのパンチに重みはなかった。それでもその拳は厳しい奮闘に対する決意の表れでもあった。足も鉛の様に重くなり，誰の目から見ても足を引きずっているのは明らかだった。その様子を見てサンデルを支持している観客は再び盛り上がり，サンデルに声援を再び送り出した。

キングは己を駆り立て，全身に力を漲らせた。そして，連続で二発のパンチを放った。みぞおちを狙った左はわずかに高かったが，右のクロスパンチはサンデルの顎にヒットした。もはやキングのパンチに重みは無かったが，体がふらつくほどサンデルの体力も限界に近づいてきており，サンデルはとうとう倒れ，体を小刻みに揺らした。レフェリーがサンデルの上に被さる様に立ち，この試合を決めるであろうカウントをサンデルの耳元で取り始めた。10カウントまでにサンデルが立ち上がらなければ，その時点でサンデルの負けである。観客たちは立ち上がり，静寂の中で固唾を呑んでその様子を見守った。キングも足を震わせながらそれをじっと見ていた。痛烈なめまいがキングを襲った。キングの視界には観客達の顔がぼんやりと揺れ動いているように映った。遠くの方からレフェリーのカウントが聞こえて来た。キングはこの試合を手にしたという思いだった。あそこまでダメージを受けた人間が立ち上がる事は不可能だった。

若い奴だけが立ち上がることができる。そしてサンデルは立ち上がった。４カウント目で寝返りを打ち，手探りでロープを探し，７カウント目で足を引きずり膝を立て，ぐらつきながらもフラフラの頭を肩に乗せ，休んだ。レフェリーが「ナイン！」と叫んだ瞬間サンデルはまっすぐ立ち上がり，正しい息抜きのポーズをとった。左は顔に引きつけ，右は腹部の辺りに構えた。このようにしてサンデルは急所をも守って見せた。そしてよろめきながらもキングに向かってクリンチを仕掛け時間を稼ごうとした。

サンデルが立ち上がった瞬間を狙い，キングは襲いかかった。しかし，繰り出した二発のパンチは，休んでいたサンデルの腕によって防がれた。次の瞬間サンデルはクリンチを仕掛け，必死にキングにしがみついて来た。レフェリーがすかさず二人の間に入り，引き離そうとした。キング自身もサンデルから離れようとした。キングは若さゆえの回復力の早さを知っていた。そしてそれを防ぎさえすればこの試合は貰ったようなものだと分かっていた。一発でも厳しいパンチが当たればそれで十分だった。サンデルはキングの手中にある，それは疑いようもなかった。キングの作戦はサンデルを上回っていた。何度も倒したうえにポイントも多く稼いでいた。サンデルはクリンチから離れ，よろめいた。もうすでに，倒れ落ちてしまうか辛うじて立ち続けてられるか，そんな瀬戸際にいたのだった。一発でもしっかりパンチを与えれば，相手はよろけ，崩れて，そして試合が終わる。その瞬間，キングの脳裏に苦い感情が走った。あの一切れのステーキを思い出したのだ。ここぞという時に必要なパンチを放つためにキングはそのステーキを欲していた。キングは拳に力を込めようとしても，それは致命的な一撃になりうるにはあまりにも弱々しく，俊敏さも失っていた。サンデルの体はぐらついたものの，ロープにもたれこみそれを掴んだので，倒れるには至らなかった。キングもサンデルに続くようによろめきながら追いかけた。死をも感じさせる様な苦痛を感じつつ，もう一発パンチを放った。しかし，キングの体はもう言うことを聞いてくれなかった。極度の疲れから，キングにはもはや戦いに関する知恵しか残されていなかった。サンデルの顎を狙ったはずのパンチも肩にさえ届かなかった。パンチの軌道を上げようとしても疲れ切った筋肉はした

がってくれなかった。そして自らのパンチの衝撃でキング自身がよろめき，倒れかけてしまった。次こそはとパンチを当てようとしても，今度は完全に空を切ってしまった。そして甚だしい疲労からキングはサンデルの方に倒れてしまい，そのままマットに沈まないためにクリンチをした。

キングは自分からは離れようとはしなかった。キングは自分の力出し尽くしていた，しかし，もうそれもとうに尽きた。キングの花は枯れていた。クリンチの最中でさえサンデルが自分よりも強くなってきていると言うのが感じ取れた。レフェリーが彼らを離した時，そこに，目の前に，すっかりダメージを回復し切った若者がいた。この試合の中でさえも毎秒ごとにサンデルは力をつけていった。最初弱々しく，焦点が合っていなかったパンチが，重く，正確になっていた。キングの霞んだ目は，サンデルのグローブに包まれたこぶしが勢いよく顎に飛んでくるのを捉えた。キングは腕を顎の前に出し，それを防ごうとした。しかし，危機を感じた彼の意思とは裏腹に，その腕は重く，何十キロとも言える重りがついているかにも思えた。もはやキングにそれを持ち上げることはできなかった。それでも魂は最後まで諦めなかった。拳がキングを直撃した。稲妻のような鋭い衝撃がキングを襲い，そして真っ黒いベールに包まれた。

目を開けるとキングは自分のコーナーにいた。ボンダイビーチの波のように押し寄せてくる観客の叫び声が聞こえた。頭の上には濡れたスポンジが押し当てられており，シド・サリバンは霧状に顔や胸に冷水を吹きかけていた。グローブはすでに外されており，サンデルが頭を下げながら手を握ってきた。自分を打ち破った相手に，負の感情はなかった。ボロボロになり，痛みを訴えているこぶしでしっかり握り返し，精一杯の誠意を示した。そしてサンデルはリングの中央に赴くと，半ば混乱状態のようになっていた観客はすっかり口を閉ざし，サンデルがヤング・プロントの挑戦を受け入れ，サイドベットを100パウンドにまであげる宣言をしているのを聞いていた。キングはその様子を放心状態で見つめていた。キングの顔はすっかり乾き切っており，セコンドはキングの周りの水をモップで拭き，そしてキングをリングから下ろす準備をしていた。キングはお腹が空いていた。それは普通の空腹ではなく，極度のめまいに襲われ，みぞおちあたりが揺れ，それが体全体を蝕む，そんな感覚で，キングには初めてのことだった。キングはサンデルをよろめかせ，敗北の瀬戸際にまで追い込んだ試合中の瞬間を思い返していた。あぁ，あのステーキを一切れでも食べていたら。もし，食べていたらあの決定的な一撃は放たれたはずだった。しかし，キングは負けた。一切れでもあのステーキを口にすることができなかったから。

セコンド達はキングがロープから出るのを助けようとしたが，キングは自力で掻い潜り，どっしりとフロアに着地した。セコンド達が密集している観客達の中央にキングを通す道を作らせ，その後をキングは足を引きずりながら歩いた。控え室を出て通りに向かう途中のホールの入り口にまで差し掛かったところで，何人かの若い男達が話しかけてきた。

「何であの時チャンスだったのに行かなかったんだよ」一人がそう言ってきた。

「うるせぇ！ 失せろ！」そう言ってキングは段差を降り，歩道に出た。

街角に佇むそのパブのドアは大きいスイングドアで，中には照明がついており，ホステスが笑みを浮かべていた。キングは多くの人間が試合について言葉を交わしているのを聞き，多くの硬貨がテーブルを行き来しているのを目にした。パブは繁盛しているように見えた。客の一人が一杯飲めと勧めてきたが，キングは大きな迷いを見せ，しまいには断り，帰って行った。

キングのポケットには一枚の小銭さえ入っていなかった。家に続く２マイルに道のりは歩くには

とても長い距離に見えた。自分が思っている以上にキングは歳をとっていた。公園に入るとキングは突然ベンチに座り込んだ。妻の顔が浮かんでくる。寝ずに試合の結果を心待ちにしてキングを待っているだろう。どんなノックアウトより，今の彼には辛い現実だった。それに向き合うことは不可能に近かった。

キングは自分の壊れた拳が少し腫れているのに気づいた。仮に土木工事の仕事を見つけることができても，シャベルを持つことができるようになるには１週間ほどかかる，キングの拳の痛みはそれほどまでだった。空腹のせいかみぞおち辺りは揺れ，それがとても不快だった。惨めさがキングに襲いかかり，目には呼んでもいない涙が溢れてきた。顔を手で隠し，泣いた。ストゥシャー・ビルのことを思い出していた。昔，あの夜，自分が奴に何をしたのか。惨めなストゥシャー・ビル！あの時，あいつが控え室で涙を流した理由がようやく分かった。

"A Piece of Steak" 1909

注

主に，最初の手紙の訳は森が，二番目の短編の訳は平田が，三番目の短編の訳は戸川が担当して訳出した。